

『キターブ・バフリエ』に見えるダルマツィア海岸

新 谷 英 治

はじめに

16世紀前半にピーリー・ライース Piri Ra'is (?-1554年頃) によって編纂された航海案内書『キターブ・バフリエ』*Kitâb-i Bahrîya* はオスマン朝盛期の地中海及びその周辺地域の事情を具体的かつ包括的に伝えており、オスマン朝においては類例の無い書物として知られる。『キターブ・バフリエ』の写本事情や叙述形式・内容に関する研究はわが国でもすでにある程度蓄積されつつある¹⁾。本稿は、『キターブ・バフリエ』本文におけるダルマツィア海岸（アドリア海東岸部）に関する記述を同書932年本系写本に基づいてオスマン・トルコ語から日本語に訳し、若干の注を付すものである。

1526年（ヒジュラ暦932年）成立の原本（932年本）から作成された写本（932年本系写本）に基づく『キターブ・バフリエ』本文の翻訳は、地中海全体に亘って、あるいは個別海域について、現代トルコ語訳やヨーロッパ諸語訳が何点か知られ、またアドリア海西岸やダルマツィア海岸の一部区域に関する翻訳・研究も発表されているが²⁾、ダルマツィア海岸域を広く対象とする日本語訳注は本稿が最初の試みとなろう。なお、本稿ではダルマツィア海岸の範囲を地理学的・行政的な区分に拘らずやや柔軟に捉えている。

『キターブ・バフリエ』932年本系写本は10種あまりが知られているが信頼すべき校訂本はいまだ無く、従来の翻訳はいずれかの写本に依拠している。本稿においては、早くからファクシミリ版が利用に供され、内容も比較的信頼性が高いと思われる Ayasofya 2612 写本を底本として日本語訳を試みる。本写本の利用にあたっては、所蔵元の Süleymaniye Kütüphanesi（在イスタンブル）か

ら提供を受けたデジタル写真データを基本にしつつ Kurtoğlu & Alpagot 1935 など既刊の写真版も適宜参照する。また Ayasofya 2612 写本とあわせて TY 6605 写本 (İstanbul Üniversitesi Kütüphanesi 所蔵) や Arı 2002 の底本となっている Hazine 642 写本 (Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi 所蔵), MS. W. 658 写本 (The Walters Art Museum 所蔵) などにも必要に応じて参照する。

本稿で訳注の対象とするのは『キターブ・バフリエ』932年本本文全210章(写本によっては全211章)の内、ダルマツィア海岸に関わる第64章から第80章までの17章である。それぞれの章題に相当する冒頭部分を一覧にして示すと次のとおりである。

第64章：本章はドゥーブラ・ウニーク Dûbra Wunik の海岸を説明する。

第65章：本章はマリダ Malida という名の島を説明する。

第66章：本章はウェネディク Wenedik 湾にあるクールスイラ Qûrsila という名の島を説明する。

第67章：本章はウェネディク Wenedik 湾にあるリーサ Lisa という名の島を説明する。

第68章：本章はウェネディク Wenedik 湾にあるラズイーナ Lazîna という島を説明する。

第69章：本章はウェネディク Wenedik 湾のカーウ・フィーグー Qâwu Fîghû という名の岬からシバニク Shibanic に至るまでの海岸を説明する。

第70章：本章はウェネディク Wenedik 湾にある城の内、ジャーラ Jâra という名の城を、そしてその正面にある島々を説明する。

第71章：本章はウェネディク Wenedik 湾のチャム・プーンタール Châm Pûntâl という名の島を説明する。

第72章：本章はウェネディク Wenedik 湾にあるサム・パルー・ダ・マーヌー Şâm Pârû da Mânû 島を説明する。

第73章：本章はウェネディク Wanadik 湾にあるアルビー Arbi という名の島を説明する。

第74章：本章はウェネディク Wenedik 湾のプルトゥー・パルムーラ Pürtû Parmûra 島を説明する。

第75章：本章はウェネディク Wenedik 湾のパーグー Pâghû という名の島を説明する。

第76章：本章はウェネディク Wenedik 湾のヴァーカ Wâka 島を説明する。

第77章：本章はウェネディク Wenedik 湾のカールスー Qârsû なる名の島を説明する。

第78章：本章はウェネディク Wenedik 湾にあるウウニヤ Uwniya という名の島を説明する。

第79章：本章はウェネディク Wenedik 湾にあるマダルーン Madalûn 城を説明する。

第80章：本章はウェネディク Wenedik 湾にあるウーラムーサールー Ūlamûsâlû とウーラムー Ūlamû の港を説明する。

これらの17章は全210章ないし211章から成る『キターブ・バフリエ』本文の全体から見ればわずかの部分に過ぎないが、オスマン朝、ヴェネツィア、ハンガリーさらにはハプスブルク家といった諸勢力の争いが激化しつつある16世紀前半期において、これらの勢力が接触する最前線であるこのダルマツィアの多島海域がオスマン朝側にどのように捉えられていたかを具体的に知ることができよう。

以下、章題冒頭の数字と英字は Ayasofya 2612 写本の該当葉を示す。原文には「第64章」等の表示は無く、本稿筆者が便宜的に補ったものである。また、訳文や注において鉤括弧や丸括弧を用いて表記された箇所は特に断りのない限り本稿筆者による補足や注記を示すものであり、原文には無い。

オスマン・トルコ語文字翻字基本原則

ء	’ (語頭時省略)	ص	ş
ب	b	ض	đ
پ	p	ط	t, t ^d
ت	t	ظ	z
ث	th	ع	‘
ج	j	غ	gh, ğ
چ	ch	ف	f
ح	h	ق	q
خ	kh	ک	k, ğ
د	d	گ	g, ğ, ñ
ذ	dh	ل	l
ر	r	م	m
ز	z	ن	n
ژ	zh	ه	h
س	s	و	w
ش	sh	ی	y

『キターブ・バフリエ』本文に見えるダルマツィア海岸
(第64章から第80章訳注)

174b 第64章：本章はドゥーブラ・ウニーク Dûbra Wunîk³⁾の海岸を説明する。

この町々をラーゲーザ・ヌーワ Râghûza Nûwa [新ラーゲーザ] とラーゲーザ・ワカ Râghûza Wâka [旧ラーゲーザ]⁴⁾ という。しかし ammâ, まずエスキ・ラーゲーザ Eski Râghûza [旧ラーゲーザ] を説明しよう, 順序に合うように kim tartîba râst gele。さて imdi, このエスキ・ラーゲーザは城 qal'a である。独自に航海する船を所有している⁵⁾。この町をドゥーブラ・ウニークのベイが管理する。この町から本来のイエニ・ドゥーブラ・ウニーク [新ラーゲーザ] は12マイルである。この間に小湾がある。ムーリーナ Mûlina⁶⁾ という。停泊地

である。しかし ammâ, この本来のドゥーブラ・ウニークは南に面した、海岸にある大きな城砦 *hişâr* である。その城砦の前面、水深7尋の海中に箱 *ş anduq* を沈めてある。その箱で港が出来ている。大きなバルチャ *barcha* [大型帆船] が出入りする。この箱の西側にある入り口は、城砦とその箱の間であるが、元来の大型船の出入りする入り口はそれである。しかし ammâ, 東側にある入り口は小さい。サングル *şandallar* [小舟、舢舨] が出入りする。潮流ができるようにと⁷⁾、港が [沈泥で] 埋まらないように [箱を] 置いている。それから *wa andan soñra*, この港の1マイル程西南の方向で、城砦 *hişâr* から半マイル程の沖合に小島がある。その小島の名をクルーマ *Qurûma*⁸⁾ という。その上に教会堂がある。この教会堂はサーン・ディマニグー *Şân Dimanighû* [*Şân Daminghû?*] という。またサム・パールー *Şâm Pârû* ともいう⁹⁾。そこで *eyle olsa*, この小島にバルチャが到着する。大索 *palamar* を使って停泊する。大索 *palamar* を小島に結ぶ。錨を城砦 *hişâr* の港に向って放つ。この小島の西側で海岸近くに塔 *burj* がある。見張っている。毎夜、城砦から警備の者が来て見張る。大砲がある塔である。しかし ammâ, この上述のドゥーブラ・ウニークの城砦 *hişâr* の沖合いからの目印は、この城砦 *hişâr* の上に大きな山があることである。その山は遠くからは二股の山に見える。15マイル程に近寄るとその山に塔が見える。この塔は、もし海上から斜桁支索のついた帆¹⁰⁾を見れば、あるいは四角の帆を見れば、要するに *wa l-hâşil*, [見えた] 帆にあわせてある種の旗を掲げる。何隻の船であれその数だけ旗を掲げる。ウェネディク *Wenedik*¹¹⁾ の方から来るならば、その旗を塔のその方向に掲げる。もしこちらから [東から?] 来ればこちら側に掲げる。下の城砦から、沖合から船が来たことが分かる。

さて *wa ba'dahu*, この城砦 *hişâr* の前にある小島からカラムータ *Qalamûta* の島¹²⁾に近づくまでの間は、その水深が20尋である。もしこのカラムータとズームパーナ *Dhûmpâna* 島¹³⁾の間を通るならば、カラムータに近く進むべし。良い通行路である。またこのズームパーナ *Dhumpâna* は良い港である。そして

港の中に教会堂がある。この教会堂をサーン・アンディリーヤ Şân Andiriya という。遠くから見える。そこで eyle olsa, 教会堂に真っ直ぐに向っていく。錨を降ろす。大索 palamar をどの方向に結んでもよろしい。錨を沖の方に向けて15尋の水深のところに降ろす。

さて wa ba'dahu, この島からマリダ Malida 島は4マイルである、西の方角に。以上¹⁴⁾。

176b 第65章：本章はマリダ Malida という名の島を説明する。

このマリダ島¹⁵⁾はドゥーブラ・ウニークに属している。また遠くからは長い島である。平らな山々がある。遠くからはあたかも蛇のように見える。また周囲は50マイル程である。ルーメリの海岸へは1マイル、2マイル程のところもある。しかし ammâ, 5箇所には有用な港がある。最初の港は、こちらの方から行くと東南の方にあるプールトゥー・カーラ Pürtû Qâra¹⁶⁾ という湾である。その湾の入り口に小島がある¹⁷⁾。イーズラ・ダ・リワーンティー İzla da Liwânti¹⁸⁾ という。この小島の両側を通る。その港に入る。大索 palamar を北東の岬に結ぶ。錨を東南方向へ降ろす。夏場には良い港である。というのは、風が陸から吹き下ろすからである。2番目の港をプールトゥー・ダ・タシュタ・ディリフリプー Pürtû da Tashta Diliflipû¹⁹⁾ という。即ち蝟の港²⁰⁾の意味になる。この港にバルチャが入る [。そういう] 港である [?]。大索 palamar を北の岬に結ぶ。錨を東南の方に降ろす。停泊する。

さて wa ba'dahu, 第3の港はプールトゥー・ダ・チヤーヌー Pürtû da Chiyânû²¹⁾ という。というのは、その港の中にむかで chiyân に似た長い小島があるからである。その小島と大きな島の間は船が通れない。浅瀬である。そこで eyle olsa, バルチャは大索 palamar をこの小島に結び、もう一本の大索 palamar を大きな島に結ぶ。停泊する。この小島が船の東に来る。しかし ammâ, いくらかの船はこの小島を西に取って停泊する。大索 palamar はその小島に結ぶ。もう一本の大索 palamar を沖合にある小さな島に結ぶ。錨を大

きな島の方へと湾の中へ放つ。停泊する。しかし ammâ, この港の目印は、この港の前に四つの小島があることである。港に入る時、すべてを東にとるべし。しかし ammâ, 沖合にある小島と2番目の小島の間はバルチャが通る。2番目の小島と東南側にある二つの小島の間をカドウルガ kadirgha [ガレー船]が通る。残りの二つの小島——南東側にあるのだが——それらの間は浅瀬である。船は通らない。4番目の港はプルトゥー・サーンタ・フィーミーヤ Pûrtû Şanta Fîmiya²²⁾ という。バルチャが停泊する。良い港である。その港の前に教会堂がある。この教会堂はサーンタ・フィーミーヤ Şanta Fîmiya という。

さて wa ba'dahu, 第5の港はプルトゥー・パラートゥー Pûrtû Palâtû²³⁾ という。比類の無い港である。この港の目印は上手に塔 birghûs があることである。また港の入り口に小島がある。その小島の両側から出入りする。この港の中から小島は3マイル程である。低くまた森のある島である。しかし ammâ, この港は100隻の船を収容できる港である。しかし wa likin, 低い場所にある。そのため塔 birghûs を建てた。嵐の日々にも躊躇うことのないように taraddud chekmeyeler, その塔 birghûs によってこの港を知るために。こうして eyle olsa, この港へバルチャが到着する。どの方角にでも大索 palamar を結ぶ。沖の方へ錨を降ろして停泊する。もし北風が吹くと小さな船は小島へ行つて大索 palamar を取つて停泊する。[この小島は] どのような方法で [停泊しても] 大丈夫なところである。しかし ammâ, この島には元来の aşllu [?] 停泊地は無い。すべて村である。また松の木の茂るところであるため、松脂 zayt [松根油?] を多く産する。以上。

178b 第66章：本章はウェネディク Wenedik 湾にあるクールスイラ Qûrsila という名の島を説明する。

このクールスイラ諸島²⁴⁾ は実際には八つの島である。しかし ammâ, 元来の有名な aşl ba-nâm ものはルーメリに近い大きな島である。この島とルーメリ

の海岸は1マイル半である。この島には城がある。人が住む。この城は、ウェネディクの支配下にある。いくつかの村々もある。人が住む。もしこの島の東南の方から上述の城へ行こうと望むならば、ルーメリ側に近寄って進むべし、浅瀬のある小島 *adajuqlar* があるからだ。また西側にある岬の端は浅瀬である。注意すべし。しかし *wali*, この岬の近くに二つの小山がある。その小山を東北東に回り込むと、港²⁵⁾がある。この港の前に小島がある。そこから中へ入る。大索 *palamar* を南へ、錨を北の方へ8尋の水深のところへ降ろす。

さて *wa ba'dahu*, この島とアグースタ *Aghûsta* 島²⁶⁾の間は良い通航路である。アギストゥー *Aghistû* とアギストゥーニー *Aghistûni*²⁷⁾。これらのアギストゥーとアギストゥーニーは二つの〔別の〕小島である。低く、また周囲は浅瀬である。しかし *ammâ*, これらの島の間をたまたま通ることになれば²⁸⁾, アグースタ *Aghûsta* 島に近寄って進むべし。アグースティニー *Aghûstini* 側は浅瀬であるから。このアグースティニーは三つの無人の小島である。いつもその小島から石を切り出している。船でその石をウェネディクの町に運んで売る。

さて *wa ba'dahu*, この島々からピラーゲーザ *Pilâghûza*²⁹⁾ は40マイルである、西南の方に。ピラーゲーザ。このピラーゲーザの沖合から行く時の目印はこうである。即ち、その東側にある岬の端が浅瀬である。その浅瀬に対面して丘がある。この丘は赤い断崖である。ピラーゲーザはその断崖によってそれと知られる。残りのところは低い。しかし *ammâ*, この島にある種の小魚がいる。その魚を、船が行って捕る。樽に入れて酢漬にする。その酢漬をあちこちへ運んで売る。その酢漬を「鰯酢漬 *sardilya turshusi*」という。

さて *wa ba'dahu*, この〔ピラーゲーザ〕島からカーサ *Qâsa* とカスーラ *Qasûla* の島々³⁰⁾ は30マイルである、北の方角へ。カーサとカスーラは二つの低い島である。その島々の両端にそれぞれ一つずつ丸い丘がある。中央部は低い。遠くからはそれぞれ二股の山に見える。しかし *ammâ*, 今述べたカーサ島は森に覆われた島である。その西南側にある岬ははなはだしい浅瀬である。ま

た長く細い岬である。上述の二つの丘は沖合からはあたかも二つのこわれた石の碾き臼のように見える。しかし ammâ, カスーラ島にも二つの丘がある。中央は低い。この島の東北側に二つの低い小島がある。西の岬は浅瀬である。その浅瀬は1マイル沖合へ出ている。深さは2尋である。

さて wa ba'dahu, 上述のカーサからリーサ Lîsa 島は20マイルである、西北の方角へ。以上。

180b 第67章：本章はウェネディク Wenedik 湾にあるリーサ Lîsa という名の島を説明する。

この島³¹⁾の周囲は35マイル程である。3村がある。人が住む。この村々はウェネディクに属する。それから wa andan soñra, この島の東北に面した岬から4マイル東南に港がある。その港をプルトゥー・マナーカーヌー Pürtû Manâqânû³²⁾ という。その港の前に小島があり、その小島の両側をバルチャが通る。もし港へ入ることがあれば、大索 palamar は東北の岬へ、リーサの島へ結ぶ。錨は西南の方角で8尋の水深のところに降ろす。しかし ammâ, この港から出て、北の方へ行くなれば、少々の浅瀬がある、小さな島々の間に。そこから向こう側に北に面して湾がある。この湾をプルトゥー・サーンタ・マリーヤ Pürtû Şanta Mariya³³⁾ という。その湾から出て、この島を西北に回り込むと、西南に面して港がある。入り江である。その入り江の西側で岬に二つの小島がある。この小島を左側にとって北北東に向ってその港に入る。良い停泊地である。この停泊地の東側にある岬を内側へ東北の方へ回り込むと湾がある。この湾をプルトゥー・カミザ Pürtû Qamiza という。「シャツの港」という意味である³⁴⁾。ここに一村がある。その村に面してプーズー Pûzû という島³⁵⁾がある。その島の停泊地は西南側にある。このプーズー島の西北側にサーンタ・アンディルヤ Şanta Andirya という小島³⁶⁾がまたある。その小島のまわりでサルディルヤ saldilya の魚³⁷⁾をたくさん捕って酢漬にする。かく知られるべし。以上。

181b 第68章：本章はウェネディク Wenedik 湾にあるラズイーナ Lazîna という島を説明する。

この島³⁸⁾は長い島である。周囲は50マイル程である。ルーメリの岸へは³⁹⁾35マイルである。2城を有する。人が住む。その城の一方をイエニ・ラズイーナ Yeñi Lazîna⁴⁰⁾と言ひ、他方をエスキ・ラズイーナ Eski Lazîna⁴¹⁾という。それぞれバルチャを収容できる港である。もしまたまイエニ・ラズイーナの前へ行き、停泊するならば、大索 palamar は東に向つて海岸に結ぶ必要があり、錨は西南西側で11尋の水深のところ降ろすべし。その港の正面に丸い小島がある。その小島を右側にとって港に入るべし。もしこの港の海上からの目印を知りたいならば、その港の上手に一山がある。その山の上に教会堂がある。この教会堂は遠くから見える。もし港の岬に錨を降ろすならば、4尋の水深に停泊する。もし島々とラズイーナ島の間を通過するならば、8尋の所を通る。さて imdi, この港の西側にプールトゥー・パルガリー Pürtû Palgharî という港⁴²⁾がある。この港に着くバルチャは2方向に大索 palamar を結ぶ。錨は放たない。というのは狭いところなのである。その正面に二つの長い小島がある。それは岩の小島 taş adajular である。沖合からの波をその岩の小島が遮断している。

さて wa ba'dahu, 上述のイエニ・ラズイーナの港を出て、東側に行くと、ラズイーナ島から2マイル離れた所に小島がある。この小島をトゥールトゥー Türtû⁴³⁾という。「曲つた島」という意味である⁴⁴⁾。ここは良い美しい港を有する、北を臨む側に。この港に入るならば、東北の方にあるサーン・ディマニグー Şân Dimanighû⁴⁵⁾ 教会堂の前で停泊する。

さて wa ba'dahu, 上述のラズイーナ島の東の岬は低く細い岬である。その岬を北北西の方に回り込むと、エスキ・ラズイーナの港である。これは東北に面した湾である。その湾の入り口に小さな小島がある。この小島を左にとってその港へ入る。

さて wa ba'dahu, このラズイーナ島からビラーサ Birâsa⁴⁶⁾は6マイルであ

る、北の方角に。ビラーサは長い島である。その島にはいくつかの村がある。この島からルーメリの海岸は15マイルである、北の方角に。以上。

183a 第69章：本章はウエネディク Wenedik 湾のカーウ・フィーグー Qâwu Fîghû という名の岬からシバニク Shibanic に至るまでの海岸を説明する。

このカーウ・フィーグー⁴⁷⁾をインジルリク İnjirlik 岬⁴⁸⁾という。ここはウースラーウン Ūslâwun⁴⁹⁾の海岸部である。しかし ammâ, ここは岬である。その岬の端にプルトゥー・サーントゥー Pûrtû Şântû⁵⁰⁾という天然の大きな港がある。この港の入り口は西北西に面している。しかし ammâ, この港をある者たちはフィアールー Fi'âlû⁵¹⁾という。つまり「大雨の降るところ sağanaklu yer」の意味である。そこで eyle olsa, その岬から少し沖合を進むべし。この「大雨」から安全であるように。

さて wa ba'dahu, この岬を2マイル程西北に回り込むと、上述のプルトゥー・サーンタ Pûrtû Şânta の港である。このプルトゥー・サーンタの正面に小さな小島が多数ある。いずれも無人の小島である。有名な ba-nâm olan 島々は、フィーグー Fîghû⁵²⁾であり、ルーズイーナ Rûzîna⁵³⁾であり、パーゲーザ Pâghûza⁵⁴⁾であり、ムルタル Murtar⁵⁵⁾である。このムルタルの西南側に港がある。その港の深さは、12から15尋までである。この港へ到着する船は大索 palamar を島に結び、錨を15尋の水深の海に降ろす。

さて wa ba'dahu, この島からワールカーダ Wârqâda 島⁵⁶⁾は12マイルである。このワールカーダ島には崩れた城がある。この城は西南に面している。その城の前は良い停泊地である。深さは18から20尋までである。その向い側にシバ・ニク Shiba Nik⁵⁷⁾という大きな城がある。その城の前に天然の広い港がある。その港の中へ川が流れる。その西側にいくらか岩礁 dökündü がある。この岩礁 dökündü をウスクーユーダルーワールナ Usuqûyûdalûwârna⁵⁸⁾という。この岩礁 dökündü の間はいずれも投錨地 demür yeri である。大索 palamar を小さな岩礁 dökündü に結ぶ。錨を12尋の水深の海に降ろす。

さて wa ba'dahu, この岩礁 dökündü からエスキ・ジャーラ Eski Jâra は12マイルである, 西北の方角に。かく知られたし。以上。⁵⁹⁾

184b 第70章：本章はウエネディク Wenedik 湾にある城の内, ジャーラ Jâra という名の城を, そしてその正面にある島々を説明する。

まさにこのジャーラ Jâralar⁶⁰⁾ は二つの城である。その城の一方をエスキ・ジャーラ Eski Jâra⁶¹⁾, もう一方をイエニ・ジャーラ Yeñi Jâra という。この城をザーディラ Zâdira という者もある。しかし ammâ, エスキ・ジャーラは以前は大きな城であつたらしい。今は shimdi 廢墟である。しかし walî, 村のような姿でいくつかの家々がある。人が住む。その家々は船を持っている。商売 tijârat を行なっている。

さて wa ba'dahu, このエスキ・ジャーラからイエニ・ジャーラは6マイルである, 向こう側へウエネディクの方に向つて。このイエニ・ジャーラは現在素晴らしい khûb 城である。その城の周囲は海である。東南側でルーメリの海岸へと鎖が張られている⁶²⁾。その鎖の内側は, 良い港である。バルチャが入る。もしその鎖から外で停泊するならば, 大索 palamar は前述の城の建物に結ぶ。錨は沖の方へ放つ。もしルーメリ⁶³⁾の側で停泊するならば, ここにはワリーダ・マイスイティラ Wâlida Mâysitira⁶⁴⁾ という入り江がある。この入り江はバルチャにはよい停泊地である。2方向に大索 palamar を結ぶ。沖の方へ錨を降ろす。

さて wa ba'dahu, このジャーラ城の正面5マイル [沖合に島々がある。その島々と今述べたジャーラの間で]⁶⁵⁾, 夏場にバルチャが停泊する。砂浜 pilâja yerler である。この浜から, エスキ・ジャーラの方, そしてシーバ・ニーク Shîba Nik⁶⁶⁾の方へ行くなれば, エスキ・ジャーラに相對した四つの小島がある。それらの小島とルーメリの間は1マイル半である。また浅瀬である。しかし walî, その浅瀬の上をカドウルガが通る。1尋半の水深である。しかし ammâ, その四つの小島の内三つをルーメリ側にして, 一つを大きな長い島の

方にして [間を] 進めば、帆を使ってカドウルガが通れる航路である。その三つの小島をイスクーイ・リユールウズィー Īsqūy Liyūruwuzī⁶⁷⁾ という。その正面の大きな島⁶⁸⁾ に三つの村がある。さて imdi, この瀬戸をシバ・ニーク Shiba Nik の方へ通過するとルーメリの海岸の近くに、一つの教会堂⁶⁹⁾ がある小島がある。その小島とルーメリの間は浅瀬である。その3マイル程南方の沖合に曲った小島がある。この小島をクールナータ・ピーチラ Qūrnāta Pīchila⁷⁰⁾ という。ここには東北に面して poryaza qarshu [東北風に対して?] よい港⁷¹⁾ がある。バルチャが入る港である。その西南西側にパルウォルサ・フィラランダ Parwarsa Firānda⁷²⁾ という四つの岩礁 dökündüler がある。その岩礁 dökündüler の間には通行路はない。しかし ammâ, これらすべての東南側にある岩礁 dökündü の間を船が通る。これらすべては、知られたし、四つの岩礁 dökündü である。その岩礁 dökündüler の西北側に長い島⁷³⁾ がある。この島は中央に西南に面して lodosa qarshu [西南風に対して?] よい港を有する。この港をプールのトゥー・ダラトゥール Pūrtū da la Tūr⁷⁴⁾ という。つまり「塔の港 birghus limani」の意味である。というのは、この島の上には二つの廃墟となった塔 birghuslar⁷⁵⁾ があるからである。この港の沖合からの目印はその二つの塔である。というのは、丁度その港の上にあるからである。近づくと yaqin qaljaq 三つの小島⁷⁶⁾ が見える。その小島にまっすぐ向っていく。両側から港に入る。しかし ammâ, 三つの島に二つの瀬戸がある。その瀬戸を通る航路はない。大きな島とそれらの間は深い。両側から出入りする。海上から [来る]⁷⁷⁾ 風をその三つの島が遮る。波が入らない。よい港である。

さて wa ba'dahu, 上述の塔のある島 birghuslu ada⁷⁸⁾ の西北の方向の境 ḥadd [端?] に大きな長い島⁷⁹⁾ がまたある。その島と塔のある島の間はよい港である。西南の方から入る。東北側は浅瀬である。しかし ammâ, その浅瀬の上を小さな船が通る。この瀬戸をプーカ・ダ・プルワルサ Būqa da Purwarsa⁸⁰⁾ という。さて imdi, この瀬戸のこちら側 [述べてきた順番で手前側, 南東側] にあるのは、塔のある島である⁸¹⁾。西北側にある島⁸²⁾ に東南に面

した港がある。この港をプールトゥー・マズィー Pûrtû Mazî⁸³⁾ という。「半分
の港」の意味である⁸⁴⁾。その港の近くに一村がある。

さて wa ba'dahu, この島を西北の方に回り込んで終端に至ると、その終端
をカーウ・ビヤンクー Qâw Biyânqû⁸⁵⁾ という。「白い岬」の意味である。こ
の岬の端に二つの低い小島がある⁸⁶⁾。その小島を回り込み、ジャーラ Jâra の
町へ来るならば、この間には大きな長い島がある。この島の上には教会堂があ
る⁸⁷⁾。その教会堂のある島とジャーラの5マイル正面にある塔を有する島⁸⁸⁾
の間をバルチャが通る。深い。この塔のある島はジャーラへ5マイル⁸⁹⁾である。
それ故にこの島に塔⁹⁰⁾を造ったのであり、塔からジャーラの方を監視している
のである。かく知られるべし。以上。

187a 第71章：本章はウェネディク Wenedik 湾のチャーム・プーンタール Châm Pûntâl という名の島を説明する。

このチャーム・プーンタールは実態は ma'nide [ma'nîde/ma'nâda], 四つの
島である。先ず、これらすべての内の大きい島⁹¹⁾は、西南に面した美しい広い
港⁹²⁾を擁する。その港の中に、つまり東側の海岸に教会堂がある。その教会堂
をサンタ・マリヤ・ダ・ミラダ Şânta Mariya da Milâda という。バルチャ
が到着する。その教会堂の方に大索 palamar を結び、西北の方へ錨を降ろす。
大索 palamar は東南側に来る。この港から出て、西北の方角にこの島を巡る
と、本来の aşl チャーム・プーンタール⁹³⁾は一つの島である。その島とこの港
のある島⁹⁴⁾の間は大変によい港である。この港へ東北の方から入ろうと望むな
ら易しい。西南の方から入るならば、その港のある大きな島の方に浅瀬があ
る。注意されたい。港に入ると、本来の aşl 停泊地は東南側にある大きな島の
入り江⁹⁵⁾である。その入り江はあらゆる風に対してよい港である。西南にある
入り口に面する海上に二つの小島がある。その小島の周囲はすべて深い。いず
れにも村々がある。

さて wa ba'dahu, 上述の島の半マイル程西北西側にイスカールダ Īsqârda⁹⁶⁾

という島がある。この島には一村がある。港はチャーム・プーンタールに面している。チャーム・プーンタール [と] この島の間を大型のバルチャが通る。深い。

さて wa ba'dahu, 上述のサント・マリヤ・ダ・ミラーダ島⁹⁷⁾の北側にかなり長い小島がある。その小島とサント・マリヤ・ダ・ミラーダ島の間はバルチャにはよい停泊地である。大索 palamar をその小さな島に結び、錨を大きな島の方に放つ⁹⁸⁾。かく知られたし。以上。

188b 第72章：本章はウエネディク Wenedik 湾にあるサーム・パールー・ダ・マヌー Şâm Pârû da Mânû 島を説明する。

このサームパールー・ダ・マヌー Şâmpârû da Mânû⁹⁹⁾ は二つの島である。その島々の一方から一方へ手で射た矢 el oqi が届く。その間はバルチャにはよい港である。しかし ammâ, この港の東南側から入る事は易しい。西北側にある入り口の両側は岩が多い。真っ直ぐに中央に進むべし。西南側にある島¹⁰⁰⁾ 一村がある。その村の前に南に面した入り江がある。この入り江はよい停泊地である。西北側にも入り江がある。その入り江でも船が停泊する。この入り江の北に向っている岬の端は浅瀬である。東北側にある島¹⁰¹⁾ の西に¹⁰²⁾ 教会堂がある。サームパールー・ダ・マヌー Şâmpârû da Mânû という。大索 palamar をその教会堂に近く結び、錨を西に降ろす。よい停泊地である。かく知られたし。以上。

189b 第73章：本章はウエネディク Wenedik 湾にあるアルビー Arbî という名の島を説明する。

このアルビー島¹⁰³⁾ は長い島である。ルーメリの岸へ半マイルである。その半マイルのところに、ルーメリの海岸にユングユリユズ Üngürüz¹⁰⁴⁾ の城がある。この城をマールズイー Mâlûzi¹⁰⁵⁾ という。ルーメリの海岸へ5マイルである¹⁰⁶⁾。その [そこから岸に沿って北西に] 5マイルあるところで、ルーメ

りの海岸に高い場所に城がまたある。この城をヤピナージャ Yāpināja¹⁰⁷⁾ という。これはユングユリュズに属する。そこから向こうは、サーンヤ Sānya 城¹⁰⁸⁾である。この城もユングユリュズに属する。しかし ammâ, 上述のアルビー島には三つの港がある。最初の港は、南東に面し、名をプールトゥー・アルビー Pûrtû Arbî という¹⁰⁹⁾。というのはその港の中にアルビーの一城があるからだ。人が住む。この城はウェネディクに属する。西に面して第二の港 [がある]。この港をサーンタ・マルカリータ Şānta Marqarîta¹¹⁰⁾ という。というのは、その港の中に教会堂があり、その教会堂をマルカリータ Marqarîta というからである。その教会堂の前はよい停泊地である。また一つ港が西北側にある。この港の中には教会堂があり、サーン・クールクール Şān Qûrqûl¹¹¹⁾ という。その向いに三つの小島がある。その三つの小島の終わるところに tamâm oldughı yerde サーンヤ城がある。かく知られるべし。以上。

190b 第74章：本章はウェネディク Wenedik 湾のプールトゥー・パルムーラ Pûrtû Parmûra 島を説明する。

この島¹¹²⁾には一村がある。人が住む。西南に面した天然の立派な港がある。この港をプールトゥー・パルムーラ Pûrtû Parmûra という。その港の入り口の西北側の岸に教会堂がある。この教会堂をサーンタ・パルムーラ Şānta Parmûra という。その教会堂と港の1マイルの正面に島がある。その島の東南側にある岬の端に岩礁 taşlar がある。この岩礁は水面には見えない。要注意である。それから wa andan soñra, 上述の教会堂のある島の西北側に二つの小島がある。それらの小島のうち [教会堂のある島との] 中央にある島に泉がある。この泉は真水である。かく知られたし。以上。

191b 第75章：本章はウェネディク Wenedik 湾のパーグー Pâghû という名の島を説明する。

このパーグー島¹¹³⁾はルーメリの海岸に近い。例えば mathalan [?], ザー

ディラ Zádira 城¹¹⁴ から向うのルーメリの海岸にプーンタ・ドゥーラ Pûnta Dûra という岬¹¹⁵がある。この岬から内側は別の一つの湾である。東南に向って入る。この湾の入り口に今述べたパーゲー島が位置している。さて eyle olsa, この島は、北に面した天然の港を擁する。その港の東南側に一城があり、パーゲー Pâghû¹¹⁶ とその城を呼ぶ。その城もまたウエネディクに属する。東南側に港がまた有り、この港の東南方向でルーメリ海岸にウエネディクの城がある。この城はヌーナ Nûna¹¹⁷ という。西側 9 マイルの沖合に島がある。その島をアウリユープーワールド Awliyûpûwârda¹¹⁸ という。一村がある。人が住む。この村はウエネディクに属する。

さて wa ba'dahu, この島の半マイル程西側にサルワ Salwa¹¹⁹ という島がまたある。この島にも村がある。しかし ammâ, この二つの島の停泊地は西南に面している。それから wa andan soñra, サルワ島のさらに西南西側にパタニー Patanî という長い岩の島¹²⁰がある。その岩の島からチャーム・プーンタール Châm Pûntâl は南の方である。かく知られるべし。以上。

192b 第76章：本章はウエネディク Wenedik 湾のヴァーカ Wâka 島を説明する。

この島¹²¹ [の対岸の] ルーメリの海岸にサーンヤ Sânya という城¹²²がある。人が住む。この城はユンギュリュズ Üngürüz¹²³ に属する。その西北 [南東?] 側にカスタールー・ヌーワ Qaşâtâlû Nûwa という城¹²⁴がある。この城もユンギュリュズに属する。これらすべての上方に海から 1 マイル程内陸に、ラムールラーカ Lamûrlâqa¹²⁵ という大きな山がある。ウエネディクの船の木はこの山から切り出される。水の桶はすべてウエネディクに向けてこの山から到着する。またこのサーンヤ城はユンギュリュズ国 Üngürüz Mamlakatü の商港 bandargâh である。商品がそこから船に入ったり出たりする。

さて wa ba'dahu, これらすべての正面 5 マイルの所に上述のワーカ島 [がある]。ウエネディクに属する。次のような話が伝えられている。ウエネディ

ク湾にある島々のいくつかは以前はユンギュリュズのものであったらしい。このユンギュリュズに対して敵が来るたびに geldikche, ウェネディクから金貨を借りて、この島々を形に入れたらしい。その後、その金貨を返済しないままである。そこでこの島々はウェネディクの手に残ったのであった。さて imdi, これらすべての島々のうちの一つをワーカ島と呼んでいる。その島の6箇所停泊地がある。第1。ワーカ¹²⁶⁾。南南東に面した城である。その城の前が港である。第2。東南に面したバシユカ Bashqa¹²⁷⁾ という村がある。その村の前が良い港である。第3。サーンヤ城に面した入り江である。第4。カスタール・ヌーフ Qaşṭāl Nūwa¹²⁸⁾ に面している。第5。この島の北北西に位置している。第6。この島の西北にカスタールー・ムーシクー Qaşṭālū Mūshqū という城がある。その城の前が良い停泊地である。この島の周囲は140マイルである。以上。

193b 第77章：本章はウェネディク Wenedik 湾のカールスー Qârsû なる名の島を説明する。

この島¹²⁹⁾の周囲は100マイルである。ルーメリ岸へは2マイル¹³⁰⁾である。この2マイルの間隔を帆を使って大型のバルチャが通過する。深い瀬戸である。この島の西側に入り江がある。その入り江の中に教会堂がある。この教会堂をサーンタ・マリーダ・ファラズイーナ Şanta Marida Farazîna¹³¹⁾ という。その正面にリリュウラ Lilyûra という小島¹³²⁾がある。この小島の故にここは良い港である。しかし ammâ, そこの元来の有名な aşl ba-nâm 港はこの島の南に面した [海岸に] ある¹³³⁾。これは天然の並びない港である。カールスー Qârsû 城¹³⁴⁾はその港の中にある。この港の少々東南側に西南に面して海岸に城がある。その城をウルサールー Ūrsârû¹³⁵⁾ という。その正面に大きな島がある。その島とこの島の間に橋がある。そこを船が通る度ごとにその橋を持上げ、吊り上げておく。船が通ると再びもとの場所へ降ろす。しかし wali, 大型のバルチャは通れない。浅瀬であり、また狭いのである。一方から一方へ手で投げ

た石 el ṭaṣhī が届く。さて imdi, 手で投げた石が届くその島をフィーガーラ Fīghāla¹³⁶⁾ という。もともと aṣl, フィーガーラは西南に面した天然の港¹³⁷⁾ である。その港のなかにフィーガーラ Fīghāla という一村がある。この港から外, 西北側に西に面してワーリダ・ラグーザ Wāliḍa Raghūza¹³⁸⁾ という入り江がある。その入り江の東南側は良い港である。その名をプールトゥー・ルーウ Pūrtū Lūwu¹³⁹⁾ という。長い港である。その入り口に小さい島が一つある。しかし ammā, 沖合からのこの港の目印はまさにこうである。即ち, その港の上方に高い一山があることである。それから wa andan soñra, 上で述べたフィガーラ港の東南側に二つ入り江がある。その入り江を東に回り込むと, 一村がある。その村の前に港がある。この港をルーシーン Lūshin¹⁴⁰⁾ という。これは良い港である。それから wa andan soñra, この島を海岸から海岸へと回り込み, また再び前に述べた橋に我々はやって来た。さて imdi, 上述の橋のかかった島々の東北側にある島——カールスー島である——その島の北に向っている岬からルーメリ岸にあるプールトゥーリー Pūrtūrī 教会堂は3マイル程である¹⁴¹⁾。ここには湾¹⁴²⁾ がある。その湾の入り口からブーカリーチャ Būqārīcha¹⁴³⁾ は東の方へ1マイルである。ブーカリーチャは海岸にある城である。ここはドゥードゥシュクー Dūdushqū¹⁴⁴⁾ に属する。上述の城¹⁴⁵⁾ からブーカリーチャ¹⁴⁶⁾ の城は海上5マイルである, 西の方角に。湾の入り口から上述のブーカリー Būqārī の城¹⁴⁷⁾ は4マイルである。この城はドゥードゥシュクーのものである。ブーカリー Būqārī からサマルティーン Ṣamārtīn¹⁴⁸⁾ の町は内陸へ25マイルである¹⁴⁹⁾。このブーカリーの城もドゥードゥシュクーのものである¹⁵⁰⁾。しかし ammā, フィューミー Fiyūmī 城¹⁵¹⁾ からサマルティーン の町は内陸へ2マイルである。フィューミー城はドゥードゥシュクー Dudūshqū のものである。これは海岸にある城である。その城の西北側にドゥードゥシュクーの城がある。パルルーカ Parlūqa¹⁵²⁾ という。その城からまさにその hamān 湾を回り込むと西北方向へ, [次いで] 西方向へ, [さらに] 西南の方へ向かって行く。この湾をカールナル Qārnār 湾¹⁵³⁾ という。カール

ナールというのは「馬の案内人 at yediji」[馬子?]の意味である。即ち、大変に激しい風が吹き下ろし、船を壊す。

さて wa ba'dahu, 上述のパルルーカ城の西側の海岸にドウドゥーシユクーが一城を持っている。この城はルーラーナ Lûrâna¹⁵⁴) という。この城はウエネディクの諸城の境界 ħudûd である。これらすべての上述のドウドゥーシユクーの城は、海岸にある五つの城¹⁵⁵) である。それらの向こうはウエネディクである。さて imdi, 上述のルーラーナ城の西南側に一城がある。この城をフィヤーヌーナ Fiyânûna¹⁵⁶) という。ウエネディクに属する。その城の前に東南に面して港を持つ。この港からカールスー島にあるサーン・ニクターラー・ファルズイーナ Şân Nîqûlâ Farzîna 教会堂は真っ直ぐに5マイルある、東南の方向に。

さて wa ba'dahu, 上述のフィヤーヌーナ城のさらに西南側にウエネディクに属する一城がある。この城をアルブーナ Albûna¹⁵⁷) という。それは南に面した港を有する。この港から出て西南に行くとムントゥー・ニグルー Mûntû Nighrû¹⁵⁸) という、海を見下ろして聳える deñize ħawâla 高い山がある。その山から残りの[向こうの] mâ 'adâ 諸港は別の章で述べよう。以上。

195b 第78章：本章はウエネディク Wenedik 湾にあるウウニヤ Uwniya という名の島を説明する。

このウウニヤ島¹⁵⁹) はウエネディクに属する。しかし ammâ, 元来 aṣl, 我々がウウニヤと呼んだその島に一村がある¹⁶⁰)。その村の前に西に面した天然の港がある。その港の入口に小島があり、その小島の周りすべて大型船が通る。深い。この港では大型船が入る。良い港である。その港から出て西から西南側に回り込むと西に向った岬の端に岩礁 taṣhlar がある。その岩礁には注意されたい。東に面した大きな湾がある。この湾をプルトゥー・ルーンクー Pûrtû Lûnqû¹⁶¹) という。「長い港」の意味である。実際に長い港である。この港へ東側から来る風が入る。しかし ammâ, その風とともに[風が吹いても]停泊が

可能な港である yatulur qâbil limandır。この港の、東南に向っている岬¹⁶²⁾から2マイル東南の所にカニー・ディルー Qanî-Dilû¹⁶³⁾という二塊の岩の小島がある。その二つの岩の間を抜ける通行路はない。しかし ammâ, その2マイルの間に岩礁 taşh があり、見えない。注意されたい。その岩の島のさらに東南側に小さい島¹⁶⁴⁾がある。その小島の周りは岩がち taşlu である。その西南側にサーン・スィグー Şân Sighû という小島¹⁶⁵⁾がある。この小島には停泊地はない。¹⁶⁶⁾

さて wa ba'dahu, 上述のウユニヤ島からプールトゥールー Pûrtûlû¹⁶⁷⁾は東北に6マイルである。あの橋 Anuñ köprisi があるのは、フィーガールー Fîghâlû 島である¹⁶⁸⁾。[その橋で] カールスー島 [Cres 島] へ渡る。カールスー島からルーメリの海岸は2マイルである。以上。

196b 第79章：本章はウェネディク Wenedik 湾にあるマダルー Madalûn 城を説明する。

上述の海岸において madhkûr kanârlarda, まず、マダ・ルー Madalûn 城¹⁶⁹⁾がウェネディクに属する。その城の1マイル正面に二つの小島がある。それらの小島をマルリー Marlî¹⁷⁰⁾という。それらの内側は良い港である。東北側から入る。しかし ammâ, 余り奥へ入らない。浅瀬である。上述の小島が東側に来る程度に入る。もし半尋の喫水の şu söker 小舟であれば、もっと中に入る。停泊する。良い港である。この港からプールマントゥール Pûlmantûr¹⁷¹⁾は南方6マイルである。このプールマントゥールは無人の白い島である。その島はルーメリの海岸に2マイルである。この間はすべて浅瀬である。沖合側に小島がある。この小島をプールマントゥールという。[この]小さいプールマントゥールと [先の] 大きいプールマントゥールの間も浅瀬である。また小さいプールマントゥールの沖合側に岩礁 taşh がある。注意されたい。もしカールナール Qârnâr 湾に風が吹くならば、大きいプールマントゥールは良い停泊地である。航行中の船は大抵そこで停泊する。この島から

ウェネディクの町本体 nafs-i Wenedik shahrı は真っ直ぐに130マイルである。正面のルーメリの海岸にあるウーラムーサールー Ülamûsâlû は5マイルである。かく知られるべし。以上。

197b 第80章：本章はウェネディク Wenedik 湾にあるウーラムーサールー Ülamûsâlû とウーラムー Ülamû の港を説明する。

このウーラムーサールー¹⁷²⁾はルーメリの海岸の港である。その港へ大型のバルチャは入らない。小さな船とイグリブ ıghribler [小型船] が入る。大型のバルチャはその港の外で沖合に停泊する。砂浜のところである。沖合から到着する時この港の目印はまさにこの通りである。即ち、三つの塊 üç bölük の高い丘が見える。その丘の一つは西側にあり、もう一つは東にある。この両者の間にある丘がちょうど上述の港の上に位置している üzerindedür。

さて wa ba'dahu, この港からプールマントゥール島¹⁷³⁾は5マイルである。ウーラムー¹⁷⁴⁾は2マイルである、ウェネディクの方角へ。ウーラムーは天然の港である。入口は西南に向いている。そこで eyle olsa, この港に到着する船は大索 palamar を西側に錨を東側に降ろすべし。

さて wa ba'dahu, このウーラムーからワルーダ Warûda¹⁷⁵⁾はウェネディクの方角へ4マイルである。このワルーダは白い岩からなる小島である。その小島の上に教会堂がある。この教会堂をサント・マリヤ・ワルーダ Şanta Mariya Warûda という。この島の東南側にある瀬戸は浅瀬である。船は通れない。しかし ammâ, サンドル şandal は通る。即ち、ルーメリの海岸に、その正面に天然の港がある。元来 aşl, プールトゥー・ワルーダ Pürtü Warûda¹⁷⁶⁾とはこの港をいうのである。その港の入り口は南に向いている。この港の沖合からの目印は、西に切り株のような形の kütük 高い岬が見えること、東にサント・マリヤ・ワルーダ Şanta Mariya Warûda 島が見えることである。

さて wa ba'dahu, ワルーダからプーラ Pûla 城¹⁷⁷⁾は [海路で] ウェネディク

の方へ4マイルである。陸路では2マイルである。

おわりに

『キターブ・バフリエ』が編纂された16世紀前半期は、周知のとおりオスマン朝にとって地中海世界への勢力拡大の時期であった。ダルマツィア海岸のさらに先、アドリア海の最奥部に陣取るヴェネツィアもまたイオニア海から東地中海にわたる一帯でその勢力を維持・拡大せんとしており、地中海各地で両者の利害が直接ぶつかる様相にあった。また、海上のみならず陸上でも、バルカン半島に展開するオスマン朝の軍事力はアルバニア、セルビア、モンテネグロからクロアチアへ、さらには山々を越えてアドリア海東岸部に迫りつつあり、やはりヴェネツィアの利益を脅かすことになる。

一方陸上では、この時期にバルカン半島におけるオスマン朝の拡大の影響を正面から受けたのはハンガリーであると思われる。このハンガリーもまたアドリア海東岸海域及びそれに沿う山域に權益を有することから、この時期以降、オスマン朝、ヴェネツィアおよびハンガリーの三つ巴の勢力争いはいっそう激化する。さらにハンガリーを通じて、あるいは直接にこの勢力争いに参画しているのが神聖ローマ帝国、ハプスブルク家であった。

『キターブ・バフリエ』においては、ダルマツィア海岸部について比較的詳細な記述が行われているが、その記述は同時代のこのような勢力争いが展開するなかで行われたものであり、特に第73章から第77章において城砦や港の帰属を具体的に記しつつ勢力範囲を示しているのは、ピーリー・ライースがこの方面の情勢に十全に関心を向けていた証左であろう。それまたオスマン朝としてこの方面へ向けていた関心の大きさを反映するものであったに違いない。¹⁷⁸⁾

注

- 1) 三橋 1966a, 1966b, 1970, 新谷 1990a, 1990b, 1992などを参照されたい。
- 2) 序文・本文を含めた書物全体にわたる翻訳・訳注としては Ökte 1988 (Ayasofya 2612 写本の画像, 原文ローマ字転写, トルコ語訳及び英語訳を取める), Ari 2002 (Hazine 642 写本に基づく原文ローマ字転写と英語訳を取める), 本文の一部のみを対象とした部分的な訳注や研究としては Heyd 1956, Soucek 1973b のほか Bausani や Mantran の一連の仕事に加え, Bacqué-Grammont et Bresc 2009 や新谷 2011b, 新谷 2015 などがある。本稿に関わりが大きい論考としては, アドリア海・ダルマツィア海岸について Bausani 1987 (1983), Novak & Mlinarić 2005, Novak et al. 2005, 同2007が, またザダル及びその周辺について Kozličić et al. 2015 がある。なお, 『キターブ・バフリエ』932年本の序文(韻文序)の部分的な訳注・翻訳としては Mitsuhashi 1976, Allibert 1988, 新谷 2011a, 新谷 2012 などがある。
- 3) ドゥブロヴニク Dubrovnik/Ragusa (It.). 本文での表記を見ると Ayasofya 2612 と Hazine 642 の 2 写本では ونیک ووبره とあるが, 988, Revan 1633 の 2 写本では ونیک ووبره とあり, その他の 6 写本では両表記が混在する [MS. W. 658, Supplément turc 956, 989, TY 6605, 171, Hüsrev Paşa 264]。東ローマ帝国による庇護の後13世紀にはヴェネツィアの, 14世紀半ばからハンガリーの庇護下に置かれたが, やがてオスマン朝の影響下で陸海の交易を展開した。19世紀初頭に一時フランス支配下に入ったのちオーストリア領となり, 1918年ユーゴスラビア領, 98年にクロアチア領となった。
- 4) ツァヴタット Cavtat/Ragusavecchia, Ragusa Vecchia (It.) と思われる。Dubrovnik の東南方約15 km のアドリア海岸に位置する海港。表記は Ayasofya 2612: 174b2 では واگه وراغوزه とあるが, واگه は参照している他の932年本系9写本すべてで واگه となっている。
- 5) Bashqa safar ider gemileri wardur.
- 6) Cavtat 北方約4 km に位置するアドリア海の高港 Mlini と思われる。
- 7) aqında maşlahat ichün. 直訳は「潮流の便宜のために」。
- 8) Dubrovnik のすぐ南の海上に位置する Lokrum Lacroma (It.) 島と思われる。
- 9) ومام پاروده دیرمه Ökte 1988: 745 では名称を San Paruda としている。
- 10) ablulı bir yelken. ラテン帆を言うのであろう。
- 11) ヴェネツィア Venezia を指す。
- 12) コロチェブ Koločep/Calamotta (It.) 島と思われる。Dubrovnik 西北の島。
- 13) Šipan/Sipano/Giuppana (It.) 島。ダルマツィア海岸で Koločep 島西北の Lopud 島(ここでは言及されていないか。とすれば記述の仕方として奇妙に感じられる)の西北に位置する。
- 14) 次頁の付図 [Ayasofya 2612: 176a] の空白部に, このマリダ島はドゥーブラ・ウニー

『キターブ・バフリエ』に見えるダルマツィア海岸（新谷）

クの領有するところである、と書き込まれている。

- 15) Mljet/Meleda (It.)/Melita (L.) と思われる。シパン Šipan 島の西に位置する。
- 16) 不詳。島の東南端の入り江か。海岸近くに小さな島がある。
- 17) bir adajukda とあるが [Ayasofya 2612: 176b6, Hazine 642: 175b6], 他の8写本では bir adajuk war とある。
- 18) Ökte 1988: 753 注262では「Mljet 島の東側で Kala 港の前に位置する小島」とある。なお、以後 Ökte 1988の注（訳注）に言及する場合は原則として英語訳に付された注に基づく。
- 19) Okuklje か。Ökte 1988: 753 注263では「Prozura: Mljet の北側にある港, 町。ダルマツィア海岸に相對する」とする。
- 20) اختوبوت ليماني とあり, akhtaput limani と解した。
- 21) Prožurska Luka か。Ökte 1988: 753 注264では「Sobra. Mljet の北側にある港, 町」とする。
- 22) Sobra か。Ökte 1988: 755 注265では「Polace. Mljet の北側の港, 町」とする。
- 23) Polače か。ただし Polače とするとその湾の入り口の島々のいくつかが全く言及されないのは不思議である。付図にも描かれていない。Ökte 1988: 755 注266では「Blatu. Mljet の西北端の港, 町」とする。
- 24) Korčula/Curzola (It.)/Corcyra Nigra (L.) 島とその周辺の島々と思われる。
- 25) Korčula 島の西端に位置する Vela Luka の海港であろうか。
- 26) Lastovo/Lagosta (It.)/Augusta Insula (L.) 島と思われる。付図では Qûrsila 島の南に同じく Qûrsila と記された茶色の島として描かれているが [Ayasofya 2612: 160a], これが Aghûsta 島であろう。
- 27) 本文途中での表題提示のつもりであろう。なお, Aghistû は Aghûsta (Lastovo 島) を指し, Aghistûnî は付図に見える三つの小島 Laghûsitîn を指すものと思われる。
- 28) gechmek wâqî olursa.
- 29) Lastovo 島の西南方, イタリア半島とのほぼ中間に位置する Palagruža/Pelagosa (It.) 島と思われる。大小2島からなる。
- 30) 前者は付図では Qâsa とあり [Ayasofya 2612: 160a], Lastovo 島の西に位置する Sušac/Cazza (It.)/Choasa (L.) 島と思われ, 後者は叙述内容からより Lastovo 島に近い Kopsište Cazziol (It.) 島と思われる。
- 31) Vis/Lissa (It.)/Issa (L.) 島と思われる。
- 32) 不詳。おそらく島の東南部に位置する Rukavac と思われる。Ökte 1988: 769 注273では「Rukavac. Vis 島の東南部に位置する, ダルマツィア海岸の港, 町」とする。
- 33) 島の東北部にあって南西に入り込む入り江の奥に位置する Vis の海港であろう。Ökte 1988: 769 注274では「島の西北 [ママ] の入り江, 港。今日 Vis の市域が占める」と

ある。

- 34) 島の西部に位置する海港 Komiza であろう。camisia, camisa (L.)/camicia (It.) はシャツの意。
- 35) Biševo/Busi (It.) 島であろう。
- 36) Sveti Andrija (Saint Andrew の意) 島であろう。Svetac (saint の意) 島とも。Vis 島の西方に位置する。
- 37) saldilya とあるが sardalya (鯛) であろう。鯛の酢漬けは前章にも現れている。
- 38) Hvar/Lesina (It.)/Pharia (L.) 島。
- 39) Rûm eli kanârîna. ルーメリの海岸に沿って、と解すべきか。989写本に كنانده とある [989: 187b2] 以外はすべての参照写本で同様の表記である。
- 40) 意味は「旧ラズィーナ」。位置は定かでないが、本文の叙述から東西に伸びる島の西部北岸に位置する Jelsa の海港に相当すると思われる。さらに西の Vrbosca, あるいはその西の大きな湾の最奥部にある Stari Grad (意味は「古いまち」) の可能性もあるが、特定しがたい。
- 41) 意味は「新ラズィーナ」。位置は定かではないが、本文の叙述および付図の示すところから、島の西部南岸の Hvar の海港に相当すると思われる。
- 42) 不詳。付図では Pürtü Palgharîni と読める [Ayasofya 2612: 182b]。
- 43) Šćedro/Torcola (It.) 島と思われる。付図では Tūrta か [Ayasofya 2612: 182b]。
- 44) イタリア語ならば torto となろう。
- 45) サーン・ダミングー Șân Daminghû と読むべきか。付図では Șânta Mânqû とある [Ayasofya 2612: 182b]。
- 46) Brač/Brazza (It.)/Bretia, Brattia (L.) 島と思われる。
- 47) Fîghû は fico (It. イチジク) などに相当する語を写していると思われる。
- 48) injirlik [anjîrlik]/incirlik (T.) はイチジクの茂みの意。Split/Spalato (It.)/Spalatum, Aspalatum (L.) の西北の岬を指すと思われるが断定できない。付図の Qâwu Fighû にあたると思われるが、場所・位置の特定はできない。Split は付図には Îspâlatû として描かれているが [Ayasofya 2612: 184a], 本文ではその名が明示的に言及されていないのは注意を要する。
- 49) Islovin/İsloven (T.) にあたり、Slovenia を指す。
- 50) 不詳。
- 51) 不詳。
- 52) 不詳。
- 53) 不詳。
- 54) 不詳。
- 55) Šibenik の西北に位置する Murter 島であろうか。「無人の小島である」との記述とは矛

『キターブ・バフリエ』に見えるダルマツィア海岸（新谷）

盾するように思われる。

- 56) 不詳。Ökte 1988: 779 注288では「Vrgada. Morter 島の西北の小島」とする。ただし、それでは付図 [Ayasofya 2612: 184a] に見られる位置関係と南北が逆になり矛盾する。
- 57) Šibenik/Sebenico (It.) と思われる。ダルマツィア海岸のほぼ中央、Krka 川河口部の奥まった入り江に位置する海港。
- 58) 不詳。Šibenik から西北方、北へ入り込む入り江の南岸に Skradir なる地名が見えるが関係するか。
- 59) この章の叙述は、Split や Trogir, Šibenik 及びそれらの間の地点の説明が簡略で、あまり要領を得ない。
- 60) Zadar, Jadera, Jadra (Dalmatian)/Zara (Venetian)/Iader, Iadera (L.) などと表記される。1409年から1797年までヴェネツィア領。この間、1571年に包囲されるなどオスマン朝の攻撃に晒された。1797年から1920年までオーストリア領。イタリアの支配を経て1944年ユーゴスラビア領に。付図にもある通り旧市街はかつては島であったと思われるが、現在は東南部が本土と繋がって地続きの半島状になっている。Kozličić et al. 2015 では次のように説明されている。1202年に第4回十字軍がヴェネツィアの利益に沿ってこの町を破壊し、住民の多くは現 Zadar の東南方約25 km に位置する Biograd/Alba Civitas/Belgrad へ逃れた。Biograd は一時的に Jadera Nova (新 Zadar) と呼ばれ、破壊された元の Zadar は Jadera Vetula (旧 Zadar) となった。事態が落ち着いて人々が元の Zadar に戻ると Biograd は今度は旧 Zadar (Zara vecchia/Jadera Vetula/Alt Zara) の名で呼ばれることになり、元の Zadar は Zara Nuova となる。「新」とは主として町の基礎施設が [再建されて] 新しいことを言うが、異郷暮らしの間に生まれた子供たちが多い [若い] 住民の様も指しているに違いないだろう。[Kozličić et al. 2015: 128 nn. 9&10]
- 61) Biograd/Biograd na Moru と思われる。注60を参照のこと。
- 62) 実際にどの位置に張られていたのか、ここでの叙述からは判然としない。Ayasofya 2612 写本の付図でも旧市街東南部城門から対岸へ橋らしきものは描かれているが、鎖と思しきものは描かれていない [Ayasofya 2612: 186b]。ただし、付図のある他の10写本を見渡すと、TY 6605: 152a, 154a と MS. W. 658: 154a 及び988: 151a で旧市街東南部城門から対岸へ3本 (ないし2本) の鎖らしきものが渡されている様子が描かれている。Ayasofya 2612 他の写本に見える橋らしきものは梯子状に描かれた鎖であろうか。
- 63) Rûm-eli は通常ヨーロッパ側のオスマン朝領 (あるいは、オスマン朝領となるべき所) を指すとされ、『キターブ・バフリエ』におけるピーリー・ライスの用法もおおむねそう考えてよいと思われるが、Kozličić et al. 2015: 128-129 n. 16 では言葉の由来を *Rum/Roma (=Rome)+el (eli)* ではなく *Romilius/romilic (=Roman)* に求める Divković

- 186b]。Kozličić et al. 2015: 132 n. 39 では Dugi Otok とするが腑に落ちない。
- 74) Kozličić et al. 2015: 132 n. 40 では、名称はロマンス語の porto dalle torri に当たり、これが Dugi Otok の今日の Luka と考えている。しかし、付図で見ると入り江と二つの塔は南西側に描かれており、Luka のように北西に口を開いた港市を指すとは考えにくい。また、nn. 41, 42 では塔（城砦）について論じているが、二つ目の塔（城砦）を Kornat 島にある Toreta とするなど、「長い島」を Dugi Otok、港を Luka と考えた故に説明に無理が生じているのではないだろうか。
- 75) Ayasofya 2612: 185b4 では بـرغـنـلـار (bir ghūnlar?) とあるが、ここでは TY 6605: 153a 他の 9 写本に従う。
- 76) 特定できないが^g Levrnaka, Borovnik, Mana などの島々を指すと思われる。Kozličić et al. 2015: 133 n. 43 では、この「三つの島」を Luka の北側の三つの島 (Luški, Maslinovac, Ravica) として航路などを説明しているが、付図上の位置が全く異なる点について言及が無い。
- 77) Ayasofya 2612 写本では 𐌆𐌆 が欠けているが、参照している他の 932 年本系 9 写本すべてに書かれている。
- 78) 文の流れから プールトゥー・ダラトゥール Pürtû da la Tûr の港と二つの塔のある長い島を指していると思われ、上の注で述べた通り、これは Kornat 島であると考える。
- 79) これが Dugi Otok/Isola Lunga (It.) 島 [名前の意味は長い島] であろう。ここでのピーリー・ライースの説明は付図における描写とも一致する。
- 80) Kozličić et al. 2015: 133 n. 49 では Buqada Burusa と写し、buca をロマンス語で hole, hollow, depression と解し、Burusa をラテン語 proversus にあてて turned to the front と解し、全体で a hollow turned to the front (between the islands) の意と説明している。
- 81) Īndi bu dhikr olan boghazuñ beri-ki birghuslu adadur. Kozličić et al. 2015: 134 の英語訳では、So, from this (nearby) side of that passage there is an island with a fortress (その通航路のこちら [近い方の) 側から、一つの要塞を有する島がある) とし、Kozličić et al. 2015: 134 n. 50 では、これは北に位置する Ugljan 島とその St. Mihovil のことを指すとする。原文はやや意味を取りにくいだが、本稿筆者は birghuslu ada を an island with a forteress と考えるのではなく、すでに述べられた「塔のある島」すなわち Kornat 島を指していると考え。ただし、付図では Ugljan 島と思われる島に塔が描かれており、ここに言う birghuslu ada が Ugljan 島である可能性も否定できない。
- 82) Dugi Otok と思われる。
- 83) Dugi Otok の西北端に近い地点に東南に面した湾 (Sakarun 湾) があり、付図の描写とも一致する [Ayasofya 2612: 186b]。Kozličić et al. 2015: 134 n. 52 でも Sakarun 湾とする。Google Earth では湾奥の海岸部には数戸の建物が見えるのみで港の施設らしきも

のは認められない [2020年11月29日確認]。

- 84) Mazi は、例えば現代イタリア語の mezzo (半分/半分の, 半ば/半ばの) に相当する語を写しているのであろう。Kozličić et al. 2015: 134 n. 52 では mezzo の意を *central or in part* としている。
- 85) Kozličić et al. 2015: 134 n. 54 では Dugi Otok の西北端の Veli Rat とする。
- 86) Veli Rat の岬の端は東北方向にわずかに伸びているが、この部分はもとはごく低い二つの島であったように見える。この部分のことを言うのか、あるいは岬の西北1kmほど沖にある二つの小島を言うのであろうか。
- 87) Kozličić et al. 2015: 134 n. 56 では、『キターブ・バフリエ』成立以前に教会堂の存在が知られている島は Iz 島のみとする。
- 88) Ugljan/Ugliano (It.) 島と思われる。付図でも塔が1基描かれている [Ayasofya 2612: 186b]。本稿注81の birghuslu ada がこの Ugljan 島であるとすると、ここで「ジャーラの5マイル正面にある」との説明的な文言付きで再度言及されていることになる。
- 89) 実際には3マイル程度か。
- 90) Kozličić et al. 2015: 134 n. 57 では、Ugljan 島の the Fortress of St. Michael とする。島の中央部で西岸に近い山上に位置する。
- 91) Molat/Melada (It.) 島を指すと思われる。
- 92) おそらく Molat/Melada 島の Molat の町の手海港であろう。
- 93) Molat 島の西北に位置する Ist 島であろう。ピーリー・ライースの理解ではこれが本来 Châm Püntâl と呼ばれるべき島だということであろう。
- 94) Molat/Melada 島のことと考えられる。
- 95) Molat 島の西北端の入り江を指すのであろう。
- 96) Skarda 島であろう。Premuda 島と Molat/Melada 島の間に位置する。
- 97) Molat/Melada 島のことに相違なく、北側の入り江の沖に細長い小さな島がある。この章では Molat 島が直接その名では言及されずに Šanta Mariya da Milada 島の名で呼ばれ、Molat 島の西北端の入り江とその向かいの Ist 島が Châm Püntâl の名を持つことになる。
- 98) براغورلر biraghurlar は文字が訂正されたかのように見える [Ayasofya 2612: 187b11]。
- 99) Olib/Ulbo (It.) 島と Silba/Selve (It.) 島であろうか。しかし、第75章 (191b-192a) で説明されている Awliyûpûwârda と Salwa が Olib 島と Silba 島に相当するようと思われる。その場合、この第72章の両島はどこにあたるか。この章は第75章とは別に用意した Olib 島と Silba 島の説明が割愛されずに全体に組み込まれたかとも思われるが、説明されている内容に共通性がなく、判断しがたい。
- 100) Silba 島にあたるか。
- 101) Olib 島にあたるか。

『キターブ・バフリエ』に見えるダルマツィア海岸（新谷）

- 102) gūnbatisīna とあるが gūnbatisīnda の意図であろう。
- 103) Rab/Arbe (It.)/Arba (L.) 島と思われる。
- 104) ハンガリーを指す。『キターブ・バフリエ』932年本系写本でハンガリーが明示的に言及されるのはこの第73章と後の第76章のみである。
- 105) 不詳。マールワズイー Mālwāzī と読むべきか。
- 106) Rūm-eli kanārīna besh mildūr. ルーメリの海岸に沿って5マイルの意であろう。Ayasofya 2612: 190a の付図で見ると、Mālūzī は島の東南端に相対する本土側海岸に位置する。
- 107) 付図では Yabanācha か。Rab 島の対岸の海港 Jablanac であろう。
- 108) Rab 島東北方の大陸岸に位置する海港 Senj/Segna (It.)/Senia (L.) であろう。
- 109) Rab 島の中央部南岸に位置する Rab の海港であろう。
- 110) 不詳。Rab 島の西北部に位置する Kampor の海港を指すか。
- 111) 不詳。Rab 島の北部に位置して西北に面する Lopar に位置するか。
- 112) Premuda 島であろう。この島の名称の پرموره Parmūra の部分はこの章の本文で港の名、教会堂の名としても現れる。Ökte 1988 はいずれも Piremude と転写しており [Ökte 1988: 472, 809, 811], またこの島を Primorje としダルマツィア海岸沖にあるとしている [同811]。参照している932年本系写本のうち、付図（地図）のみの2写本を別にしてその他の10写本（Ayasofya 2612を含む）を見ると、章題、港、教会堂いずれについても پرموره ないしは پرموره と表記されており、Revan 1633で教会堂の名が پرموره Pārmūda とあるのが唯一の例外である。この پرموره が本来正しい形である可能性も否定はできないが、ここでは پرموره を採り、Ayasofya 2612: 190b2, 4, 6 に付された母音符号に従って Parmūra と転写した。前後の関係によりこの島は Zadar 西北約50 km に位置する Premuda 島にあたると思われる。
- 113) Pag/Pago (It.)/Pagus (L.) 島であろう。Zadar 西北方に位置する。
- 114) Zadar を指す。第70章を参照。
- 115) 不詳。Nin/Nona の西北方に伸びる岬を指すのであろうか。
- 116) Pag/Pago の海港。島の中央部、北に開いた湾の南に位置する。
- 117) Zadar の北方、Pag 島の南に位置する Nin/Nona (It.)/Aenona, Nona (L.) の海港であろう。
- 118) 付図では Ūlibū とある。叙述内容から Olib/Ulbo (It.) 島と思われるが、第72章でも Olib 島が述べられているとすると両章の関係をどう理解すべきか。
- 119) 叙述内容から Silba/Selve 島と思われるが、第72章でも Silba 島が述べられているとすると両章の関係をどう理解すべきか。
- 120) 不詳。Premuda 島との間の小島群を指すか。
- 121) Krk/Veglia (It.)/Curicta (L.) 島であろう。

- 122) Senj/Segna (It.)/Senia (L.) であろう。第73章参照。
- 123) 注104で述べた通り、『キターブ・バフリエ』932年本系写本でハンガリーが明示的に言及されるのはこの第76章と第73章のみである。
- 124) 不詳。Senj 南方の Sveti Juraj あるいは Lukovo などの海港を指すのであろうか。
- 125) 不詳。Ökte 1988: 817 注311では、「おそらく Rajinac のこと。クロアチア海岸の Senj の南の山」とする。Mali Rajinac の山（標高1609 m）であれば、Senj の東南方約20 km に位置する。
- 126) Krk 島の中央部南岸に位置する Krk の海港。
- 127) 島の東南部の入り江に位置する海港 Baška であろう。付図ではマーシュカ ماشقه Mâshqa とある。
- 128) 参照している10写本すべてにおいて *قستالو* Qaštâlû ではなく *قستال* Qaštâl とある。
- 129) Cres/Cherso (It.)/Crepša (L.) 島であろう。
- 130) 実際には間に Krk 島があり、2マイルという記述はあまりに近いことになり、不自然である。Krk 島と大陸との間隔であれば記述として有りうる数字である。Novak et al. 2005: 106 でも指摘されているように付図 [Ayasofya 2612: 195a] には Krk 島が全く描かれていない。他の写本でも同様である。こういった点に鑑みると、Krk 島に関する情報を Cres 島の情報として述べている可能性があろう。
- 131) 不詳。場所は Cres 島の北端で西に面する海岸に位置する Porozina であろうか。付図で *Şanta Mariya Arazîna* とある。
- 132) Cres 島中央部西の沖に位置する小島 Zeča であろうか。
- 133) *jazīra-yi mazbûruñ qıblaya qarshu* [kanârında] dur と解した。
- 134) Cres を指すと思われる。
- 135) Osor/Ossero (It.) を指すと思われる。
- 136) Lošinj/Lussino (It.)/Apsorrus (L.) 島と思われる。Cres 島の Osor と橋で結ばれている。付図では *Jazīra-i Asûra* と記されている [Ayasofya 2612: 196a]。
- 137) 位置は定かではないが、Lošinj/Lussino 島の中央部に南に開く湾に位置する Artatore の海港を指しているか。
- 138) 不詳。
- 139) 不詳。付図では *Pürtü Liyûra* か [Ayasofya 2612: 195a]。
- 140) Lošinj 島の Mali Lošinj/Lussinpiccolo (It.) の海港であろうか。
- 141) 実際にはこの Cres 島と大陸の間には Krk 島がある。説明が不正確、不十分な印象がある。注130参照。
- 142) Bakar 湾であろう。
- 143) Bakarac/Buccarizza (It.) と思われる。
- 144) 本文では *دودشغو* Dūdushqū (あるいは *دوشغو* Dudūshqū) と書かれているが、付図の都市

名表記では **دودوشقه** Dūdūshqa となっている。この Dūdūshqū/Dūdūshqa はスロヴェニア語の地名に由来しオーストリアの Kärnten 地方に当たるとされる [Turková 1950: 317-320; Römer 2013: 117-118]。Kärnten 地方は現在オーストリア南部の Kärnten とスロヴェニア北部の Koroška とに国境を挟んで分かれているが、もとは一体の地域である。14世紀前半にオーストリア大公（ハプスブルク家）の支配下に入り、15世紀後半以後オスマン朝勢力による侵入・略奪をしばしば受けるようになった。19世紀初頭の神聖ローマ帝国消滅にともない、オーストリア帝国さらにオーストリア=ハンガリー二重帝国の統治の下に置かれた。「Dūdūshqū/Dūdūshqū に属する」は Dūdūshqū/Dūdūshqa を Kärnten 地方とする Turková らの考えに従えば「Kärnten に属する」の意になるが、当該の諸城が16世紀前半当時神聖ローマ帝国あるいはハプスブルク家の支配下にあることを言うとも解釈できよう。ただし、Turková らの考えはエヴリヤ・チェレピー（1685年頃没）の『旅行記』の記述に基づいた推論であり、100年以上遡る1526年に成立した『キターブ・バフリエ』932年本のここでの用例も考慮に入れたうえで Dūdūshqū/Dūdūshqa の意味と実態を再検討する必要があるだろう。

- 145) どの城砦を指すか判然としない。文脈に従えば上で言及された Qārsū/Cres あるいは Ūrsārū/Osor を指すことになろうが、Būqarīcha/Bakarac はこれらの城砦から北北東の方向に位置しており、「西」に位置するとの記述とは矛盾する。注146参照。
- 146) 参照している10の写本すべてに Būqarīcha/Bakarac とあるが、この後に述べられる Būqarī/Bakar/Buccari の誤りではないだろうか。これが正しく Būqarīcha/Bakarac であるとするとすぐ前に書かれている「上述の城」がどこを指すか判然としない（注145参照）。この Būqarīcha が Būqarī の誤記と考えれば「上述の城」は Būqarīcha であると考えることができ、相互の位置関係もより理解しやすくなる。Būqarī/Bakar は Būqarīcha/Bakarac の西北方向に位置しており、また Bakar 湾口からの距離の点でも記述が整合する。Būqarī がこの後で「上述のブーカー城 madhkūr Būqarī qal'ası」と書かれていることも得心がいく。
- 147) Bakar であろう。注146参照。
- 148) 不詳。
- 149) 参照写本の多くでは25マイル（Revan 1633: 192b1 及び 171: 199b1 では20マイル）とあるが、すぐ後にフィューミー Fiyūmī 城との距離が2マイルと記されており（10写本すべて）、Bakar と Rijeka/Fiume 間が10 km（6マイル前後に相当するか）足らずであることを考えると、もっと小さい数字（例えば5マイル）になるはずであろう。
- 150) ブーカーがドゥードゥシクのものであることはすでに上で述べられており、記述が重複している。
- 151) Rijeka/Fiume (It. & Hungarian) と思われる。
- 152) 不詳。Ökte 1988: 825 注324では、「恐らく Opatija (Abbazio) であろう。Fiume から

2マイル西北の城砦都市」とする。Opatija/Abbazia (It.) は Rijeka の西北西約10 km に位置する海港である。

- 153) Kvarner/Quarnaro (It.) 湾。
- 154) Lovran/Laurana (It.) であろう。
- 155) ここで名のあがっている海岸部に位置する5城、すなわちブーカリーチャ Bûqaricha, ブーカリー Bûqarî, フィューミー Fiyûmî, パルルーカ Parlûqa, ルーラーナ Lûràna を指すと思われる。
- 156) Plomin/Fianona (It.) と思われる。Ökte 1988: 825 注327では「Fianona. Rijeka 湾で Lovran の南の海岸にある城」とする。
- 157) 不詳。
- 158) 不詳。
- 159) Unije/Unie (It.) であろう。Kvarner 湾の入り口に位置する。Ayasofya 2612: 195b1, 2, 15 ではウニヤ Uwniya と読めるが、写本により母音符号に差異があつて定めがたい (Uwniya? [Hazine 642: 194a1-2], Awniya/Ûniya? [MS. W. 658: 162b1-2], Ûniya? [TY 6605: 162b1-2], Ūnya? [989: 201a1, 2; 201b1], Ūniya? [988: 159b1, 2, 16] など)。
- 160) その村の名前でその島が呼ばれている、の意であろう。
- 161) Unije 島の東岸、Unije の海港の東北方向にある三つの入り江のいずれかを指すのであろう。いずれも東南向きの入り江である。
- 162) この Unije 島の南端へと延びる岬のことであろう。
- 163) Unije 島の南端の先に Vele Srakane/Canidole Grande (It.) と Male Srakane/Canidole Piccola (It.) という二つの小島がある。Google Earth では両者の間には暗礁があるかに見える [2020年11月29日確認]。
- 164) Male Srakane の300 m ほど東南に小さな島がある。
- 165) Susak/Sansego (It.) 島であろう。Ökte 1988: 829 ll. 35-36 の英語訳では San Nigu と読んでいるが誤りであろう。Ökte 1988: 829 注332では「恐らく Sansego のこと。Unije の西南の小島」としている。
- 166) Susak 島には現在小規模ながら港がある。
- 167) 第77章で説明されている Fighâla 島 (Lošinj 島) のプールトゥー・ルーウ Pûrtû Lûwu のことだろう。第77章の付図では Pûrtû Liyûra かと思われる (注139参照) が、本章の付図では Pûrtû Liyûy か [Ayasofya 2612: 196a]。前後に隣接する章でありながら付図における地名表記が異なる点は注目すべきであろう。
- 168) フィーガルー島 (Lošinj 島) からカールスー島 (Cres 島) へは橋がある旨が第77章で説明されている。
- 169) Medulin/Medolino (It.) であろう。
- 170) 不詳。現在 Medulin の海港を囲むように二つの岬があるが、それぞれ元は島だったの

『キターブ・バフリエ』に見えるダルマツィア海岸（新谷）

ではないか。Ökte 1988: 833 注334では「Merlera. イストラ半島の端の沖に位置する小島群」とする。

- 171) 不詳。Medulin の南方沖合のいくつかの島々か、あるいは Kamenjak 岬西方の Otok Fenoliga と Otočić Porer を指すか。Ökte 1988: 833 注335では「Promantora. イストラ半島西南端沖の小島」とする（Promantora はトルコ語注 335では Polmantor, Premontora, Premantora とも）。
- 172) 不詳。Veruda 島南西方向の陸地側にある入り江のいずれかに位置するか。
- 173) 第79章では大小二つの島として説明されている。注171参照。
- 174) 不詳。Veruda 島南西方向の陸地側にある入り江のいずれかに位置するか。
- 175) Veruda 島。Pula 旧市街南方の島。付図では İzla Şânta Mariya Warûda としている [Ayasofya 2612: 198a]。
- 176) 記述の模様から Veruda 島北方の陸地側にある入り江を指していると思われる。付図では Pürtû Şânta Mariya Warûda となっている [Ayasofya 2612: 198a]。
- 177) Pula/Pola (It.) であろう。イストリア半島南部西岸の海港。次章（第81章）で説明される。
- 178) Novak らは、主に『キターブ・バフリエ』諸写本の付図の分析に基づきながら、オスマン朝側がこのようにダルマツィア海岸域に関心を向けている一方でヴェネツィア側の地図製作者がこの海域に関する詳細な像を持っていなかったのは普通ではないと指摘する [Novak et al. 2005: 110]。

参考文献（一部筆者未見の文献を含む）

『キターブ・バフリエ』*Kitâb-i Bahriya* 932年本系写本

- | | | |
|---|-----------------------|--|
| ① | Ayasofya 2612 | Süleymaniye Kütüphanesi (İstanbul) |
| ② | Hazine 642 | Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi (İstanbul) |
| ③ | Revan 1633 | Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi (İstanbul) |
| ④ | MS. W. 658 | Walters Art Gallery (Baltimore) |
| ⑤ | Supplément turc 956 | Bibliothèque Nationale (Paris) |
| ⑥ | 988 | Deniz Müzesi Kütüphanesi (İstanbul) |
| ⑦ | 989 | Deniz Müzesi Kütüphanesi (İstanbul) |
| ⑧ | TY 6605 [Yıldız 6605] | İstanbul Üniversitesi Kütüphanesi (İstanbul) |
| ⑨ | 171 | Köprülü Zade Fazıl Ahmed Paşa Kütüphanesi (İstanbul) |
| ⑩ | Hüsrev Paşa 264 | Süleymaniye Kütüphanesi (İstanbul) [付図無し] |
| ⑪ | MS. 3609 | Biblioteca Universitaria di Bologna (Bologna) [本文無し] |
| ⑫ | Bağdat 338 | Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi (İstanbul) [本文無し] |

- Afetinan (Afet İnan),
1974: *Piri Reis'in Hayatı ve Eserleri*, Ankara.
1975: *Life and Works of Piri Reis*, Ankara.
- Allibert, C.,
1988: Une Description Turque de l'Océan Indien au XVI^e Siècle. L'Océan Indien Occidental dans le *Kitâb-i Bahriye* de Piri Re'is (1521), *Étude Océan Indien*, 10, pp. 9-51.
- Alpani, Nexhip P.,
1981: Bregdetet e Shqipërisë në fillim të shek. XVI., *Studime Historike*, 35 (18)-3, pp. 223-234.
- Ari, Bülent,
2002: (ed.) *Piri Reis, Kitâb-ı Bahriye*, Ankara
- Bacqué-Grammont J.-L., et Bresc, Henri,
2009: La Sicile et les Iles Voisines dans les Portulans de Piri Re'is (1521-1526), *MEFRIM (Mélanges de l'Ecole Française de Rome-Italie-Méditerranée)*, 121-2, pp. 485-590.
- Bausani, Alessandro,
1979: L'Italia nel *Kitâb-i Bahriyye* di Piri Reis, *Il Veltro. Rivista della Civiltà Italiana*, 23-2-4, pp. 173-196.
1980: La Sardegna nel *Kitâb-i Bahriyye* di Piri Reis, *Geographia*, II, pp. 71-79.
1982: La Coste Toscane nel *Kitâb-i Bahriyye* di Piri Reis, Aldo Gallotta & Ugo Marazzi (eds.), *Studia Turcologica Memoriae Alexii Bombaci Dicata*, Napoli, pp. 29-40.
1983a: La Costa Campana da Napoli a Policastro nel Portolano di Piri Reis (1521-1527), *Annali della Facoltà di Scienze Politiche*, Università di Cagliari, 9, pp. 71-80.
1983b: La Costa Italiana del Tirreno, da Civitavecchia a Ischia, nel Portolano di Piri Reis (1521-1527), *Rasa'il in Memoria di Umberto Rizzitano*, Palermo, pp. 53-64.
1984: Le Coste della Penisola Salentina nel Portolano di Piri Reis, Renato Traini (ed.), *Studi in Onore di Francesco Gabrieli nel Suo Ottantesimo Compleanno*, Vol. 1, Roma, pp. 53-59.
1985 (1988): La Costa Muggia-Trieste-Venezia nel Portolano (1521-1527) di Piri Reis, C. Sarnelli Cerqua (ed.), *Studi Arabo-islamici in Onore di Roberto Rubinacci nel suo Settantesimo Compleanno*, Napoli, pp. 65-69.
1986: Le Coste Ioniche della Calabria da Taranto a Reggio nel Portolano di Piri Reis (1470-1554), L. Serra (ed.), *Gli Interscambi Culturali e Socio-Economici fra l'Africa Settentrionale e l'Europa Mediterranea. Atti del Congresso Internazionale di Amalfi, 5-8 dicembre 1983*, Napoli, pp. 453-67.
1987 (1983): Venezia e l'Adriatico in un Portolano Turco, L. Lanciotti (ed.), *Venezia e*

- l'Oriente*. Atti del XXV Corso Internazionale di Alta Cultura (Venezia, 27 agosto–17 settembre 1983), Firenze, pp. 339–352.
- 1990: *L'Italia nel Kitab-ı Bahriyye di Piri Reis*, Leonardo Capezzone (ed.), Venezia. Cardonne, D. D.,
- 1765: (trad.) *Le Flambeau de la Méditerranée*, Bibliothèque Nationale, Fr. 22972.
- Dalli Sonetti, Bartolomeo,
- Isolario*, Biblioteca Nazionale Marciana (Venezia, Italia), Cod. It. IX. 188.
- Deutsches Hydrographisches Institut,
- 1935: *Mittelmeer-Handbuch, IV. Teil, Griechenland und Kreta*, 4. Auflage, Berlin.
- 1959: *Mittelmeer-Handbuch, I. Teil, Ostküste Spaniens und Balearen, Südküste Frankreichs und Korsika*, 4. Auflage, Hamburg.
- 1965: *Mittelmeer-Handbuch, V. Teil, Die Levante*, 5. Auflage, Hamburg.
- 1966: *Mittelmeer-Handbuch, II. Teil, West- und Südküste Italiens, Sardinien und Sizilien*, 5. Auflage, Hamburg.
- 1967: *Mittelmeer-Handbuch, III. Teil, Die Nordküste von Afrika*, 5. Auflage, Hamburg.
- Esin, Emel,
- 1980: La Géographie Tunisienne de Piri Re'is, à la Lumière des Sources Turques du X^e/XVI^e Sicèle, *Les Cahiers de Tunisie*, (Numéro spécial), pp. 585–605.
- 1986: La Description des Côtes Algériennes de Piri Ra'is, *Studies on Turkish-Arab Relations*, pp. 47–60.
- Fürst-Bjeliš, Borna & Zupanc, Ivan,
- 2007: Images of the Croatian Borderlands: Selected Examples of Early Modern Cartography, *Hrvatski geografski glasnik*, 69/1, pp. 5–19.
- Goodrich, Th. D.,
- 1985: Atlas-ı Hümayun: A Sixteenth-Century Ottoman Maritime Atlas Discovered in 1984, *Archivum Ottomanicum*, 10, pp. 83–101.
- 1986: The Earliest Ottoman Maritime Atlas—The Walters *Deniz Atlası*, *Archivum Ottomanicum*, 11, pp. 25–50.
- 1990: *The Ottoman Turks and the New World. A Study of the Tarih-i Hind-i Garbi and Sixteenth-Century Ottoman Americana*, Wiesbaden.
- 2004: A Cartographic Innovation of Piri Reis in His *Kitab-ı Bahriye*,” in *CIÉPO: Osmanlı Öncesi ve Osmanlı Araştırmaları Uluslararası Komitesi – XIV. Sempozyumu Bildirileri, 18–22 Eylül 2000*, ed. Tuncer Baykara (Ankara: Türk Tarih Kurumu), pp. 201–210.
- n. d. (2004): The 5658 Maps of the *Kitab-ı Bahriye* of Piri Reis, *Uluslararası Piri Reis*

- Sempozyumu Tebliğler Kitabı (27-29 Eylül 2004)*, İstanbul, <6-92>-<6-113>.
- Harley, J. B. & Woodward, D.
1992: (eds.) *The History of Cartography*, Vol. 2, Book 1, *Cartography in the Traditional Islamic and South Asian Societies*, the University of Chicago Press.
- Hess, Andrew C.,
1970: The Evolution of the Ottoman Seaborne Empire in the Age of the Oceanic Discoveries, 1453-1525, *The American Historical Review*, 75-7, pp. 1892-1919.
1974: Piri Reis and the Ottoman Response to the Voyages of Discovery, *Terrae Incognitae*, 6, pp. 19-37.
- Heyd, U.,
1956: A Turkish Description of the Coast of Palestine in the Early Sixteenth Century, *Israel Exploration Journal*, 6, pp. 201-216.
- Hoye, Paul F. & Lunde, Paul,
1980: Piri Reis and the Hapgood Hypotheses, *Aramco World Magazine*, 31-1, pp. 18-31.
- 飯田 巳貴,
2016: 「16, 17世紀のヴェネツィアとアドリア海の海外領土——経済的側面からの考察——」, 《越村編 2016》, pp. 55-70。[英文別掲]
- Imber, C. H.,
1980: The Navy of Süleyman the Magnificent, *Archivum Ottomanicum*, 6, pp. 221-282.
- İrdesel, Mehmet,
1975: *Büyük Denizci-Bilgin Amiral Gelibolu'lu Piri Reis, Hayatı ve Eserleri*, İstanbul.
- Isom-Verhaaren, Christine,
2014: Who Was an Ottoman in the Naval Forces of the Ottoman Empire in the 15th and 16th Centuries?, *Osmanlı Araştırmaları/The Journal of Ottoman Studies*, XLIV, pp. 235-264.
- İstanbul İtalya Kültür Merkezi/Istituto Italiano di Cultura di İstanbul,
1994: *XIV-XVIII Yüzyıl Portolan ve Deniz Haritaları/Portolani e Carte Nautiche XIV-XVIII Secolo*, İstanbul.
- Kaçar, Mustafa,
2013: *Piri Reis ve Kristof Kolomb Öncesi İslâm Haritaları*, İstanbul.
- Kahane, H. & R., Tietze, A.,
1958: *The Lingua Franca in the Levant, Turkish Nautical Terms of Italian and Greek Origin*, Urbana.
- Kahlaoui, Tarek,
2018: The Imperial Ottoman Mediterranean and the Transmission of the Tenth-/

Sixteenth-Century Mapping of the Mediterranean, Tarek Kahlaoui, *Creating the Mediterranean*, Leiden, 240-262.

Kahle, Paul,

1926: *Piri Re'is, Bahriye, Das Türkische Segelhandbuch für das Mittelländische Meer vom Jahre 1521*, Band I (Text), Band II (Übersetzung) 1, Berlin und Leipzig.

1929: Piri Re'is und seine Bahriye, *Beiträge zur historischen Geographie, Kulturgeographie, Ethnographie und Kartographie, vornehmlich des Orients*, Leipzig und Wien, pp. 60-76.

1933: A Lost Map of Columbus, *The Geographical Review*, 23, pp. 621-638.

1956: The Turkish Sailor and Cartographer, S. Moinul Haq (ed.), *The Proceedings of the Pakistan History Conference*, Karachi, pp. 101-111.

Kissling, Hans Joachim,

1966: *Der See-Atlas des Sejjid Nüh, 1. Teil: Einleitung und Karten*, München.

1969a: Zur Tätigkeit des Kemäl-Re'is im Westmittelmeer, *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes*, 62, pp. 153-171.

1969b: Die Istrische Küste im See-Atlas des Piri-Re'is, *Studia Slovenica Monacensia in Honorem Antonii Slodnjak Septuagenarii*, München, pp. 43-52.

1973: Zur Beschreibung des Rhône-Deltas in der Bahriye des Piri-Re'is, *İslam Tetkikleri Enstitüsü Dergisi*, 5, pp. 279-287.

越村 勲,

2016: (編) 『16・17世紀の海商・海賊——アドリア海のウスコクと東シナ海の倭寇』, 彩流社。

Kozličić, Mithad & Mlinarić, Dubravka & Andrić, Marta,

2015: Zadarski akvatorij u Piri Reisovoj Knjizi pomorstva iz 1526. godine: Pomorskogeografske slike dijela hrvatskoga Jadrana/The Zadar Maritime Zone in Piri Reis' Book of Navigation of 1526: Maritime and Geographical Images of Part of the Croatian Adria, *Geoadria*, 20/2, pp. 119-147.

Kurtoğlu, F. & Alpagot, H.,

1935: (eds.) Piri Reis, *Kitabı Bahriye*, İstanbul.

サーニャ・ラザニン (Lazanin, Sanja),

2016: 「難民から海賊へ——ウスコクとそのアドリア海での活動に関する史学史的概論——」(越村勲訳), 《越村編 2016》, pp. 37-54。[英文別掲]

Lepore, F. & Piccardi, M. & Rombai, L.,

2013: Looking at the Kitab-i Bahriye of Piri Reis, *e-Perimetron: International Web Journal on Sciences and Technologies affined to History of Cartography and Maps*

(Thessaloniki), 8-2, pp. 85-94.

Lepore, F. & Piccardi, M. & Pranzini, E.,

2011: *Costa e Arcipelago Toscano nel Kitab-ı Bahriye (1521 e 1525), Un Confronto Cartografico (Secoli XIII-XVII)*, Pisa.

Loupis, Dimitris,

2004: Piri Reis' *Book on Navigation* (Kitab-ı Bahriyye) as a Geography Handbook : Ottoman Efforts to Produce an Atlas during the Reign of Sultan Mehmed IV (1648-1687), George Tolia and Dimitris Loupis (eds.), *Eastern Mediterranean Cartographies*, Tetrada Ergasias, 25/26, Athens, pp. 35-49.

Mantran, Robert,

1973: La Description des Côtes de l'Algérie dans le Kitab-ı Bahriye de Piri Reis, *Revue de l'Occident Musulman et de la Méditerranée*, 15 · 16, pp. 159-168.

1977: La Description de la Côte de la Tunisie dans le Kitâb-ı Bahriye de Piri Reis, *Revue de l'Occident Musulman et de la Méditerranée*, 24, pp. 223-235.

1981: La Description des Côtes de l'Égypte dans le Kitâb-ı Bahriye de Piri Reis, *Annales Islamologiques*, 17, pp. 288-310.

1985: La Description des Côtes Méditerranéennes de la France dans le Kitâb-ı Bahriye de Piri Reis, *Revue de l'Occident Musulman et de la Méditerranée*, 39, pp. 69-78.

1986: La Description des Côtes de l'Andalousie dans le Kitâb-ı Bahriye de Piri Reis, *Actes du XII^e Congrès de l'Union Européenne des Arabisants et Islamisants (Malaga 1984)*, Madrid, pp. 497-507.

Mascaretti, Vincenzo & Spinucci, Carminio,

2019: *Gli Ottomani in Adriatico, Pirati e Corsari Turchi tra XV e XIX secolo*, Acquaviva Picena.

三橋 富治男,

1966a: 『オスマン=トルコ史論』, 吉川弘文館.

1966b: 「キターブウ・バフリエ」の著者ピリー・ライスと世界古地図について, 『オリエント』, 9-2 · 3, pp. 199-220.

1966c: 16世紀・東方水域におけるオスマン=トルコ, 『駿台史学』, 19, pp. 33-53.

1970: ピリー・レイスの「海洋の書」に見えるシナ海, 『オリエント』, 13-3 · 4, pp. 171-184.

1975: セイデ=アリ=レイスとインド洋——オスマン朝古典史料キャティプ=チェレビイの訳述——, 『千葉大学人文研究』, 4, pp. 11-29.

Mitsuhashi, Fujio,

1976: A Study of the "Çin Deniz" in the "Kitab-ı Bahriye" compiled by Piri Reis, *İsmail Hakkı Uzunçarşılı'ya Armağan*, Ankara.

Mlinarić, Dubravka,

2011: The Novak Collection as an Inspiration: Characteristics of Some Rare Maps of the Northern and Central Dalmatian Coastline and the Role of Local Cartographers/
Zbirka Novak kao inspiracija: Osobitosti nekih rijetkih karata priobalja sjeverne i srednje Dalmacije i uloga domaćih kartografa u njihovu nastanku, *Kartografija i Geoinformacije*, 16, pp. 72-91.

Novak, Drago & Mlinarić, Dubravka,

2005: Adriatic Coast and Islands in the *Kitab-ı Bahriye* by Piri Reis/Jadranska obala i otoci u djelu *Kitab-ı Bahriye* Piri Reisa, Drago Novak, Miljenko Lapaine, Dubravka Mlinarić (eds.), *Five Centuries of Maps and Charts of Croatia/Pet stoljeća geografskih i pomorskih karata Hrvatske*, Zagreb, pp. 331-367.

Novak, Drago & Mlinarić, Dubravka & Lapaine, Miljenko,

2005: A Comparative Analysis of the 16th Century Ottoman Mapping of the Croatian Coast and Islands/Uspredbena studija osmanskog kartografiranja hrvatske obale i otoka u 16. stoljeću, *Kartografija i geoinformacije (Cartography and Geoinformation)*, 4, pp. 78-110.

n. d. (2004): Description of Croatian islands and Harbours from Dubrovnik to Umag in Istria by Piri Reis in the *Kitab-ı Bahriye*/Piri Reis'in *Kitab-ı Bahriye*'sinde, Dubrovnik'ten Istria'daki Umag'a kadar olan Hırvatistan Adaları ve Limanlarının Tanınlanması, *Uluslararası Piri Reis Sempozyumu Tebliğler Kitabı (27-29 Eylül 2004)*, İstanbul, <6-64>-<6-91>.

Ökte, Ertuğrul Zekâi,

1988: (ed.) Piri Reis, *Kitab-ı Bahriye*, 4 vols., Ankara.

Özdemir, Kemal,

1994: *Piri Reis*, İstanbul.

Özukan, Bülent,

2013a: (ed.) *Piri Reis, Kitâb-ı Bahriye*, İstanbul.

2013b: (ed.) *Piri Reis, The Book of Bahriye*, İstanbul.

2013c: (ed.) *Piri Reis, 1513 Dünya Haritası*, İstanbul.

Pedani, Maria Pia,

2015: Piri Reis in Venetian Documents, *Mediterranea: Ricerche Storiche*, 34, pp. 319-324.

2008: Ottoman Merchants in the Adriatic. Trade and Smuggling, *Acta Histriae*, 16 (1-2), pp. 155-172.

Pitcher, Donald Edgar,

1968: *An Historical Geography of the Ottoman Empire*, Leiden.

Römer, Claudia,

2013: La Langue Européenne nommée Tâlyân chez Evliyâ Çelebi et ailleurs, *Cahiers Balkaniques*, 41, *Evliyâ Çelebi et l'Europe*, pp. 117-128.

Rothman, E. Natalie,

2011: Conversion and Convergence in the Venetian-Ottoman Borderlands, *Journal of Medieval and Early Modern Studies*, 41-3, pp. 601-633.

Sachau, E.,

1910: Sicilien nach dem Türkischen Geographen Piri Reis, *Centenario della Nascita di Michele Amari*, II, Palermo, pp. 1-10.

Senemoğlu, Yavuz,

1974: (terc.) Piri Reis, *Kitâb-ı Bahriyye, Denizcilik Kitabı*, 2 vols.

Sezgin, Fuat,

2013: *Piri Reis and the Pre-Columbian Discovery of the American Continents by Muslim Seafarers*, İstanbul.

新谷 英治,

1990a: “Kitâb-i Bahriya” の性格——Ayasofya 2612 写本本文を中心に——, 『東洋史研究』, 49-2, pp. 107-139.

1990b: 『キターブ・バフリエ』ヒジュラ暦927年本系写本 8 種, 『京都橘女子大学研究紀要』, 17, pp. 222-246.

1991: 『海洋の書』とポルトラーノ, *Mare Nostrum* (京都外国語大学地中海文化研究会研究報告), 3, pp. 68-81.

1992: 『キターブ・バフリエ』の全体像とオスマン朝の地中海世界, 『西南アジア研究』, 37, pp. 1-18.

1997: 『キターブ・バフリエ』ヒジュラ暦932年本序文, 『関西大学東西学術研究所紀要』, 30, pp. 55-83.

1998: トルコ人の見た地中海——『キターブ・バフリエ』写本研究から——, 『泊園』, 37, pp. 96-143.

2000: オスマン朝期の地中海航海案内書と地図, 新谷英治編『中東世界の伝統技術に関する歴史地理学的研究』(科学研究費補助金基盤研究(A) [研究代表者新谷英治] 研究成果報告書), pp. 209-235.

2001: ピーリー・ライースの世界認識——*Kitâb-i Bahriya* 韻文序と世界図 2 種の分析から——, 『関西大学東西学術研究所創立50周年記念論文集』, 関西大学東西学術研究所, pp. 167-184.

2003: オスマン朝期航海案内書の世界像, 内山勝利編『論集 古典の世界像』(科学研究費補助金特定領域研究(A)118「古典学の再構築」研究成果報告集 V, A04「古典の世

『キターブ・バフリエ』に見えるダルマツィア海岸（新谷）

- 界像」調整班〔代表内山勝利〕研究成果報告), pp. 198-211.
- 2006: 16世紀のオスマン朝におけるローカル・アイデンティティとグローバル・スタンダード——地中海航海案内書と世界図の分析から——, 芝井敬司編『西洋の歴史に見る「グローバル・スタンダード」と「ローカル・アイデンティティ」〕(科学研究費補助金基盤研究(A)〔研究代表者芝井敬司〕研究成果報告書), 46-52.
- 2011a: 『キターブ・バフリエ』韻文序に見えるインド洋, 橋寺知子・森部豊・蜷川順子・新谷英治共編『アジアが結ぶ東西世界』, 関西大学東西学術研究所, 420-449.
- 2011b: 『キターブ・バフリエ』に見えるアナトリア南岸, 『西南アジア研究』, 第75号, pp. 44-68.
- 2012: 『キターブ・バフリエ』韻文序に見えるペルシア湾及びインド洋西部, 森部豊・橋寺知子共編『アジアにおける文化システムの展開と交流』, 関西大学出版部, 179-208.
- 2015: 『キターブ・バフリエ』に見えるシリア海岸, 『関西大学東西学術研究所紀要』, 第48輯, pp. 89-107.
- 2016: 地中海国家オスマン朝とピーリー・ライース作品, 近藤信彰編『近世イスラーム国家史研究の現在』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 121-142.
- 2016: 異なる2種の『キターブ・バフリエ』, 『関西大学東西学術研究所紀要』, 第49輯, 2016年4月, pp. 127-161.
- 2018: 『キターブ・バフリエ』に見える祈りの場, 『関西大学東西学術研究所紀要』, 第51輯, 21-46.
- 2020: 地中海世界の祈りの場——オスマン朝の航海案内書から——, 新谷英治・松井幸一編『祈りと祈りの場』, 関西大学東西学術研究所, pp. 245-268.
- Soucek, Svat,
- 1971: The 'Ali Macar Reis Atlas' and the *Deniz Kitabı*: Their Place in the Genre of Portolan Charts and Atlases, *Imago Mundi*, 25, pp. 17-27.
- 1973a: À propos du Livre d'Instructions Nautiques de Piri Re'is, *Revue des Études Islamiques*, 41, pp. 241-255.
- 1973b: Tunisia in the *Kitab-i Bahriye* by Piri Reis, *Archivum Ottomanicum*, 5, pp. 129-296.
- 1975: Certain Types of Ships in Ottoman-Turkish Terminology, *Turcica*, 7, pp. 233-249.
- 1992: Islamic Charting in the Mediterranean, Harley, J. B. & Woodward, D. (eds.), *The History of Cartography*, Vol. 2, Book 1, *Cartography in the Traditional Islamic and South Asian Societies*, The University of Chicago Press, pp. 263-292.
- 1992/1996: *Piri Reis and Turkish Mapmaking after Columbus, The Khalili Portolan Atlas*, London.
- 1993a: Piri Re'is, *The Encyclopaedia of Islam*, New Edition, Vol. 8, pp. 308-9.
- 1993b: Piri Reis and Süleyman the Magnificent, Halil İnalçık and Cernal Kafadar (eds.),

- Süleyman the Second and his Time*, Istanbul, pp. 343-52. [reprinted in Svat Soucek, *Studies in Ottoman Naval History and Maritime Geography*, Piscataway-U.S.A. / Istanbul-Turkey, 2009]
- 1994: Piri Reis and Ottoman Discovery of the Great Discoveries, *Studia Islamica*, 79, 121-142. [reprinted in Svat Soucek, *Studies in Ottoman Naval History and Maritime Geography*, Piscataway-U.S.A./Istanbul-Turkey, 2009]
- 2009: *Studies in Ottoman Naval History and Maritime Geography*, Piscataway-U.S.A./Istanbul-Turkey.
- 2013a: *Piri Reis & Turkish Mapmaking after Columbus*, İstanbul.
- 2013b: *Piri Reis ve Kolomb Sonrası Türk Haritacılığı*, İstanbul.
- ナタシャ・シュテファネツ (Štefanec, Nataša),
2016: 「ウスコク、戦争と交易の間で——アドリア海とその後背地におけるヴェネツィア・オスマン・ハプスブルク国境と海賊——」(越村勲訳), 《越村編 2016》, pp. 13-35。[英文別掲]
- Turková, Helena,
1950: Mutmassliche Erklärung des Wortes „دودوشقه“ im Sejâhatnâme des Evlijâ Čelebî, *Archiv Orientální*, 18-4, 317-320.
- Uzunçarşılı, İ. H.,
1948: *Osmanlı Devletinin Merkez ve Bahriye Teşkilâtı*, Ankara.
- Ülkekel, Cevat,
2007: XVI. Yüzyılın Denizci bir Bilimadamı Yaşamı ve Yapıtlarıyla Piri Reis, 3 cilt, İstanbul.
- Ventura, A.,
1988: *La Puglia di Piri Reis. La Cartografia Turca alla Corte di Solimano il Magnifico*, Scritture e Città, 3, Cavallino.
1990: *Il Regno di Napoli di Piri Reis, La Cartografia Turca alla Corte di Solimano il Magnifico*, Scritture e Città, 6, Cavallino.
1991: *Gli Stati Italiani di Piri Reis. La Cartografia Turca alla Corte di Solimano il Magnifico*, Scritture e Città, 7, Cavallino.
n. d. (1999/2000): *L'Italia di Piri Re'is. La Cartografia Turca alla Corte di Solimano il Magnifico*, Cavallino.
- Yürükçü, Aytaç,
2019: Kitab-ı Bahriye (Book of Navigation), Commemoration of the Piri Reis and Understand His World Map of 1513, *Proceedings of the International Cartographic Association, 2, 2019. 29th International Cartographic Conference (ICC 2019)*, 15-20

『キターブ・バフリエ』に見えるダルマツィア海岸（新谷）

July 2019, Tokyo, Japan, <https://doi.org/10.5194/ica-proc-2-154-2019> | © Authors
2019. CC BY 4.0 License.